

学内広報

for communication across the UT



特集：追跡！リユースノート PC ができるまで

2010.6.22

No. 1400

特集

ノートPCリユース事業
1周年特別企画



追跡！リユースノートPCができるまで

ごあいさつ

日頃より、ノートPCリユース事業にご協力いただきありがとうございます。

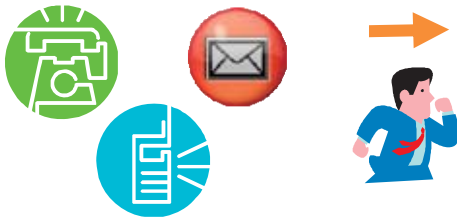
この事業が昨年7月7日の科所長会議で学内に周知されてから、もうすぐ1年になります。おかげさまで各部署の研究室や事務室からご提供いただいた不用ノートPCは336台にのぼり、96名の学生がリユースPCを利用し、各自研究や教育に役立てています。今後も学内資産の有効活用と学生への研究、教育支援のため、引き続きご理解、ご協力よろしくお願いたします。

そこで今回は、みなさまに、本事業をより深く知っていただくためにも、不用ノートPCがどのように回収され、リユースPCへと再生し、学生に貸与されていくのか、順を追ってご紹介いたしましょう。

まずはご連絡ください

不用のノートPCが発生しましたら、美津野商事(株)までご連絡ください。担当者が、みなさまのご都合のよいときに、**直接研究室まで伺います**。担当事務等への事前の連絡は不要です。

(メールでも電話でも可)



リフレッシュすれば大丈夫ですよ

電源がね、ちょっと問題あるんですよ



まずは、外見チェック



データの消去方法のご希望や、付属品の有無、マシンの状況について簡単な聞き取り調査をします



大学総合教育研究センター
特任教授
藤原毅夫先生
「リユースの対象を、ノートPC以外も幅広く広げたらどうかなあ」



PC専用の梱包資材(左)
複数台引き取る時はコンテナも利用します
さあ、いよいよ再生現場です!!



再生現場初公開！



回収したノートPCは美津野商事(株)の専用作業場で再生作業を行います

ここで行う作業は・・・

- ① 外見チェック（故障品は再生からはずされます）
- ② クリーニング
- ③ データ消去
- ④ インストール
- ⑤ カタログ作成



専用クリーナーで丁寧に汚れを拭き取ります
キーボードの隙間のゴミもブラシや専用掃除機で取り除きます



消去方法は希望の方法を選べます

- 上書きソフトによる消去(左)
 - HDDを取り外しドリルで破壊(右)
- 回収先でHDDの取り外し



希望により
消去証明書
をお渡します

回収先でHDDを破壊する携帯用ドリルも用意しています



カシヤツ

No.	機種	色	状態	備考
1	ThinkPad	黒	正常	
2	ThinkPad	黒	正常	
3	ThinkPad	黒	正常	
4	ThinkPad	黒	正常	
5	ThinkPad	黒	正常	
6	ThinkPad	黒	正常	
7	ThinkPad	黒	正常	
8	ThinkPad	黒	正常	
9	ThinkPad	黒	正常	
10	ThinkPad	黒	正常	

はい、チーズ！

ウェブサイトに載せるカタログ用に写真撮影もします



セキュリティは
万全！！

回収したノートPCは部屋の外で受け渡します
社員でも担当者以外は、作業場には入れません



故障しているPCはメモリや、付属品など使える部品を有効活用しています
(写真はACアダプタ)



OSやアプリケーションソフトをインストールして完成です
ようやく学生さんの元へ！



1年間無料でレンタル

再生されたリユースPCはノートPCリユースオフィスに納品され、年に3回(5月、9月、1月)学生に募集を行います。東京大学の学生ならだれでも申し込みますが、リユースオフィスで選考のうえ採択されます。
採択された学生は1年間無料で使用できます。

ノートPCリユースオフィスは本部資産管理部資産課内にあります
お気軽にお越しください！



手作り看板が目印！



申請書には指導教員の承認サインが必要です



本郷、駒場、柏の各キャンパスに設置された回収BOXに申請書を提出します



オフィス専用ウェブサイト、募集要項、申請書、リユースPCのカタログ等を掲載しています

申請書を元にリユースオフィスで貸与者を選考します
採択者にはメールで連絡します

募集開始のアナウンスは、ポスター掲示、学生向けサイト等で行います
(募集期間は約2週間)

大切に使うくださいね

選考は非公開！！

ここだとネットが使えるんです



学生は、学生証を提示し、誓約書にサインをします
スタッフから使用上の注意を受けた後、リユースPCを受け取ります



図書館のメディアプラザでデータ入力
研究室でも自宅でも、どこでも使用できます



経済学研究科経営専攻
博士課程1年 浜松翔平さん

「研究上、国内外の企業を訪問し、経営者や従業員の方にインタビューをしています。リユースPCは、取材のまとめや、会議の議事録に利用しています。以前、中国に取材に出かけた時、ノートしかなく大変でした。そのため持ち運びのできるリユースPCを借りることができ、本当に助かります。これからも是非続けてください！！」



1年後、成果報告書を添付し、リユースPCを返却します
更新希望の場合は、成果報告書の内容で判断します
返却されたリユースPCは再度再生作業を経て、リユースに回します

ノートPCの利用者数と回収台数

()内は個人からの寄贈品

以下は、平成22年5月末現在の利用学生数と不用ノートPCの回収台数の部局別の内訳です

回収したPCの中には故障やメーカー問い合わせ中で再生保留中のもの、再生はしたものの次回の応募にまわすものも含まれています

○ リユースノートPC利用学生数

部局	計
法学政治学研究科・法学部	15(1)
医学系研究科・医学部	2(0)
工学系研究科・工学部	8(6)
人文社会系研究科・文学部	13(1)
理学系研究科・理学部	6(0)
農学生命科学研究科・農学部	6(3)
経済学研究科・経済学部	7(1)
総合文化研究科・教養学部	10(2)
教育学研究科・教育学部	4(2)
薬学系研究科・薬学部	2(1)
数理科学研究科	1(0)
新領域創成科学研究科	5(2)
情報学環・学際情報府	1(0)
情報理工学系研究科	3(2)
前期課程	13(0)
合計	96(21)

()内は留学生内数

文系学部生	15	理系学部生	6
文系院生	35	理系院生	27
前期課程	13		

○ ノートPC回収台数

部局	計
医学系研究科・医学部	36
工学系研究科・工学部	84
人文社会系研究科・文学部	4(2)
理学系研究科・理学部	45
農学生命科学研究科・農学部	32
経済学研究科・経済学部	3
教育学研究科・教育学部	6
総合文化研究科・教養学部	4
薬学系研究科・薬学部	15
数理科学研究科	1
新領域創成科学研究科	1
情報理工学系研究科	32
アイトープ総合センター	1
人工物工学研究センター	6
大学総合教育研究センター	1
医学教育国際協力研究センター	9
情報基盤センター	2
素粒子物理国際研究センター	3
数物連携宇宙研究機構	1
医科学研究所	7
地震研究所	1
東洋文化研究所	14
生産技術研究所	5
物性研究所	2
大気海洋研究所	5
先端科学技術研究センター	7
附属図書館	5
柏地区事務部	2
本部	2
合計	336(2)

おわりに

回収から学生への貸与まで一連の流れを追いかけてまいりましたが、いかがだったでしょうか？
手探りで始めてきたこの事業もようやく2年目になりました。検討すべき課題はまだまだ沢山ありますが、スタッフ一同これからもさらに一層努力してまいりますので、みなさまからの不用ノートPCのご提供を、首をなが〜くしてお待ちしております！

※連載コラム「PCリユースのわ」もあわせてお読みください

ノートPCリユースオフィス

(本部資産管理部資産課内)

E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp

<http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/teachers/index.html>

内線: 22135 (担当 青木・高橋・戸田)

美津野商事株式会社 システム事業部

E-mail: reuse@mizuno.net

電話: 03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

(担当 川崎・石井)

NEWS

春の紫綬褒章受章

門脇孝教授、土井正男教授、阿部啓子名誉教授、杉山雄一教授、辻井潤一教授、末廣昭教授が、本年春の紫綬褒章を受章いたしました。

門脇 孝 大学院医学系研究科・医学部教授

この度、門脇孝教授（大学院医学系研究科・医学部）が、糖尿病代謝学に関する研究の功績により、平成 22 年春の褒章において紫綬褒章を受章されました。

門脇教授は、長年にわたり糖尿病や肥満の成因・病態の分子機構に関する研究に邁進され、我が国および世界の糖尿病学・代謝学をリードしてこられました。先生の業績は、(1) インスリン受容体やミトコンドリア遺伝子異常による糖尿病の同定、(2) 糖代謝・肥満制御分子の遺伝子改変マウスなど発生工学的手法を用いた 2 型糖尿病・メタボリックシンドロームの分子機構の解明、(3) PPAR γ の生理的意義の解明と糖尿病治療薬チアゾリジン誘導体の作用機序の解明、(4) アディポネクチンのインスリン感受性亢進作用の発見とアディポネクチン受容体同定など、生命の基本原則を解き明かす基礎的な研究から、実臨床に直結する応用的研究まで膨大で多岐にわたりますが、その視点は常に糖尿病やメタボリックシンドロームの制圧という目標に注がれてきました。ことに、先生が世界に先駆けて同定されたアディポネクチン受容体を介するアディポネクチンの作用は、糖・脂質代謝を改善するばかりでなく、動脈硬化の抑制や運動の代替作用などを有し、糖尿病やその合併症の画期的治療法につながるものとして大いに期待されています。

先生は、このように精力的に基礎研究を推進される一方で、現在、総長特任補佐として本学の運営・管理にも貢献されており、また医学部附属病院副院長および糖尿病・代謝内科科長として附属病院の診療の向上にも尽力されています。さらに、先生は日本糖尿病学会理事長として、我が国全体の糖尿病診療の発展や糖尿病予防の推進に日夜取り組まれています。どのような場合にあつ



ても、一臨床家として常に温かいまなざしで一人一人の糖尿病患者さんに接し続けておられます。

今後、先生のご研究がますます発展し、糖尿病とその合併症に苦しむ人たちに、一日も早い福音がもたらされることを祈念して已みません。

(大学院医学系研究科・医学部)

土井 正男 大学院工学系研究科・工学部教授

本学教授（工学系研究科物理工学専攻）である土井正男教授がソフトマター物理学の研究の功績により平成 22 年春の紫綬褒章を受章されました。

土井教授は高分子液体や液晶の流動や変形が示す複雑な性質をミクロな機構で説明することにはじめて成功しました。その結果レオロジー（物質のマクロな流動性、変形性を研究する学問）で知られていた現象や性質をその物質の分子構造に基づいて説明する、分子レオロジーという新しい学問分野を切り開くこととなりました。

特に、イギリスの Edwards 教授との共同研究は、高分子のもつ形状効果を「管模型」によってモデル化し、長年の未解決問題であった粘度の 3.5 乗則、Cox-Mertz の法則などの実験則を、高分子の分子量や分岐構造に基づいて理論的に説明することに初めて成功しました。この Doi-Edwards 理論は、屈曲性高分子、および棒状の高分子の絡み合い系の粘弾性理論として、高分子科学の最も重要な基礎の一つとなっています。土井先生はさらにこの理論を高分子液晶に拡張し、液晶相の流れを記述する Ericksen-Leslie の理論を初めて分子論的に導出し、粘性係数の微視的な表式を与えました。この流れは、高分子工業にもインパクトを与え、望む性質をもつ高分子材料の開発の指針となっています。

土井先生のご研究は DNA の電気泳動、ゲルの体積相転移のダイナミクス、コロイドの凝集と粘弾性、磁性流体および電気粘性流体、界面活性剤系の自己組織構造、界面の粘着・剥離・摩擦のレオロジーなど、液晶、ゲル、コロイド、界面での幅広い現象を網羅し、レオロジー、ソフトマター物理研究の世界的なリーダーであり、土井先生のご著書である“The Theory of Polymer Dynamics”と“Introduction to Polymer Physics”は、高分子の標準的教科書として世界中の大学教育に役立っています。

近年、土井先生は高分子のミクロスケール、メゾスケール、マクロスケールの現象をシミュレーションする統合システム OCTA を開発し、その精力的な研究・開発で、計算物理学のこの分野の発展にも大いに寄与しています。開発されたプログラムは無償で一般公開され、1600 名の登録ユーザを抱え、世界中の企業と大学で用いられています。



これからも土井先生が世界をリードする研究をますます発展させられることを願い、ご健勝を祈念いたします。
(大学院工学系研究科・工学部)

阿部 啓子 名誉教授 (大学院農学生命科学研究科・農学部)

本年3月に本学を定年退職なさいました阿部啓子東京大学名誉教授が、食品科学の研究における功績により、平成22年春の褒章で紫綬褒章を受章されました。



阿部先生は、食品の“おいしさ”を、物質科学と生体科学の両面から表裏一体のものとして解析を行ってきました。生体科学の面においては、『味覚』という感覚情報を的確にとらえ、食品の『味』を深く理解するため、「味物質→味細胞→味神経→中枢」に至る各段階の現象を機能分子の実体から明らかにする方法論、つまり味覚分子論という考えを提示し、実証してきました。また物質科学の面においては、熱帯植物果実から精製して構造決定した味覚修飾タンパク質（ネオクリンと命名）の持つ、酸味を減弱して甘味を増強する味覚修飾活性の作用機序を明らかにしました。またネオクリンに点変異を導入することで強い甘味タンパク質を世界で初めて創出した結果は、味覚生理学から食品科学まで幅広い領域の研究者に大きなインパクトを与えました。また、これらの解析で確立した味覚受容体を用いて味の強度を測定する技術は、いわゆるヒト味覚計量デバイスの開発へとつながり、味強度の数値化・科学的な味設計への利用を目指す技術として、産業界から大いに注目されています。これ以外にも、食品の持つ機能性を生体の遺伝子発現変動によって評価しようとするニュートリゲノミクスの分野において、世界の第一人者といえる研究成果を挙げてきました。

また、食品に関連する本研究科の寄付講座（「機能性食品ゲノミクス」、「味覚サイエンス」）および東京大学総括プロジェクト機構総括寄付講座「食と生命」を設置するにあたり中心的な役割を果たし、東京大学における食品研究を強力に牽引されました。また各省庁の食品関連委員会委員、各研究プロジェクト審査委員・評価委員、学会理事・評議員等、多数の役職を通じて、我が国の食品研究・食品産業の発展に尽力されておられます。

これからも阿部先生の益々のご活躍とご健勝を祈念してやみません。

(大学院農学生命科学研究科・農学部)

杉山 雄一 大学院薬学系研究科・薬学部教授

本学教授(大学院薬学系研究科・薬学部)である杉山雄一教授が、薬物動態学における研究の功績により、平成22年春の褒章で紫綬褒章を受章されました。



杉山先生はトランスポーターが医薬品の生体膜透過に関わり、異物解毒システムの重要な構成因子であることを明らかにされました。薬効標的蛋白への医薬品の暴露を決定する薬物動態に関して、医薬品の血液中滞留性を決定する肝臓・腎臓の排泄機構、あるいは医薬品の中枢移行を決定する血液脳関門の能動的関門機構として機能するトランスポーター分子群を解明するとともに、遺伝子多型研究や薬物間相互作用研究を通じて、ヒト薬物動態におけるトランスポーターの重要性を実証されてきました。また、医薬品の肝胆系輸送において細胞内への取り込みと排出に関わるトランスポーターを同時に極性細胞に発現させたダブル発現細胞を複数開発され、本細胞は国内外の多くの製薬企業において肝胆系輸送の *in vitro* 評価システムとして創薬プロセスの中に導入されています。薬物速度論を基盤とした数理モデルを用いることで、代謝酵素やトランスポーターなどの分子機能を細胞、臓器そして全身レベルにまで連結し、ヒト薬物体内動態や薬物間相互作用を *in vitro* 試験に基づいて定量的に予測することを可能とするなど、創薬や医薬品適正使用に大きく貢献されました。1997年からの10年間で、杉山先生の論文の被引用回数は薬理学・毒性学分野で世界第1位であり、世界の研究者から注目されています。

こうした業績に対し、この度の褒章に加え、日本薬剤学、日本薬物動態学会、日本薬学会、米国薬学会の学会賞や、国際薬学連合 Hoest-Madsen Medal、持田記念学術賞、高峰記念三共賞、上原賞など多数の賞を受賞されています。特に、米国薬学会賞は、米国在住以外の研究者として杉山先生が初めての受賞者であり、世界的にも高く評価されています。

これからも杉山先生のご活躍とご健勝を祈念してやみません。

(大学院薬学系研究科・薬学部)

辻井潤一教授(大学院情報学環・学際情報学府、大学院情報理工学系研究科、理学部情報科学科)が平成22年春の褒章において紫綬褒章を受章されました。



辻井潤一教授は、受賞の対象となった自然言語処理研究において、機械翻訳における先駆的な業績ならびに、深い言語解析や意味に基づくテキストマイニング手法の開発、その生命科学分野の文献への適用などで国際的に高く評価される研究成果を収められています。教授は京都大学に在職中、機械翻訳の国家プロジェクト(Mu)において中心的な役割を果たされた後、1988年、英国マンチェスター科学技術大学(UMIST)の教授、および、同大学計算言語学センター(CCL)の所長に就任されました。UMIST在職中には、ヨーロッパ連合の機械翻訳プロジェクト(Eurotra)のプログラム言語設計の中心として活躍されるなど、大きな成果を上げておられます。

1995年、東京大学理学部情報科学科教授に就任されたからは、言語学理論に基づく深い言語解析とデータに基づく統計手法との融合、生命科学分野の意味付記コーパス(GENIA)構築とその利用などに顕著な成果を上げてこられました。

2005年には、英国国立テキストマイニングセンター(NaCTeM)の初代所長として招聘され、現在は、情報学環、情報理工学系研究科の教授であるとともに、同センターの研究ディレクター、および、マンチェスター大学コンピュータ科学科の教授を兼任しておられます。

同センター、および、2006年度からの文部科学省・特別推進研究「高度言語理解のための意味・知識処理の基盤技術に関する研究」において、先生は、言語の構造・意味の処理を中核にした新しいテキストマイニング技術を提唱し、テキスト中の情報と知識とを結ぶ、次世代技術の基盤を確立されつつあります。

今回の受章は、教授の四十年の研究生活を通じた、人間の言語と意味・知識との関係を取り扱う計算機技術という難問への取組みと、世界の研究をリードしてこられた業績が高く評価されたものであるといえます。(大学院情報学環・学際情報学府、大学院情報理工学系研究科、理学部情報科学科)

社会科学研究所長 末廣昭教授が平成22年春の紫綬褒章を受章された。



同氏の研究は、東アジア地域の研究、特にタイ国に関する歴史的事実的研究と、「アジア経済社会論」の2つを柱としてきた。第1にタイ国研究は、現地での徹底した聞き取り調査やタイ語・華語の第一次資料を含む膨大な文献の探索と収集を長年にわたって続け、その上で、タイの歴史と現状を「地域研究」(Area Study)の観点から総合的に捉えようとするものである。また、1997年にタイから始まったアジア通貨危機以後では、日本がアジア諸国との経済協力関係にも深く関与していくなか、タイとアジア地域に関する同氏の緻密な実証研究と広範な知識が、JICAの国別支援計画や外務省の政府開発援助(ODA)の策定、そして文部科学省が進める「地域研究推進事業」に生かされてきた。

第2に「アジア経済社会論」もしくは「東アジア経済社会論」の研究は、その対象をタイから東アジア諸国・地域に拡大し、当該地域諸国の経済発展や工業化のプロセスを、一方では、①個別の産業の動向、個別の企業の経営や戦略にまで踏み込んで明らかにし、他方では、②冷戦体制後の東アジアの政治体制の変遷を「国の開発」の動きと関連させ、「開発主義」の観点から明らかにした点に、大きな特徴を持つ。

前者(①)については、ともすれば各国の政府の政策、貿易と投資のマクロデータの統計の整理と分析にとどまっていた従来の「アジア経済論」を、アジア工業化論として発展させ、東アジア地域に限らず、発展途上国に共通する工業化の特徴的なパターンとして、「キャッチアップ型工業化」という独自のモデルを提唱した。また、「工業化の担い手」に注目する視点を導入し、東アジアの工業化を支えてきた国営・公企業、多国籍企業、ファミリービジネス(家族企業)の3つについて、緻密な実証にもとづいて草分け的な研究業績を挙げてきた。

後者(②)については、従来、欧米や日本の政治学者は、東アジアの政治体制を、国民統合とナショナリズム、権威主義体制と民主化の観点からもっぱら論じてきたと言える。これに対して、同氏は東アジア、とりわけ東南アジア地域の政治体制を、「国の開発」「開発主義」というキーワードを使い、経済や社会の変容と関連させて総合的に理解する「地域研究」の立場を重視する立場から実証的研究を進め、タイのみならず東南アジアや北東アジアにおける政治経済分野の後進の研究者に多大な影響を与えた。

同氏はその後、各国の企業福祉や福祉国家戦略の展開を視野に収めた「東アジア福祉システムの国際比較」のプロジェクトを立ち上げ、2010年には『東アジア福祉システムの展望——7カ国・地域の企業福祉と社会保障制度』を刊行している。(社会科学研究所)

一般ニュース

生命科学ネットワーク

第10回東京大学生命科学シンポジウム

一般

5月1日(土)、安田講堂及び工学部2号館において、第10回東京大学生命科学シンポジウムが開催された。昨年より、生命科学教育支援ネットワークと生命科学教育ネットワークの二つの組織が統合され、生命科学ネットワークとして、総合的なシンポジウムの運営を行うことになり、これまで行ってきた生命科学に関するシンポジウムを合わせると、東京大学の生命科学シンポジウムは今回で第10回目を迎える。生命科学ネットワークは、生命科学に関わる学内16部局で構成され、研究者交流や教科書作成などの活動を通じて、研究教育支援に取り組んでいる。

当日は五月晴れの下、学内外合わせて約1,000名の幅広い年代層の方々にご来場いただき、どの会場も賑わいを見せた。シンポジウムは、講演の部・部局紹介ブース(安田講堂)、ポスターセッションの部(安田講堂、工学部2号館フォーラム・展示室)から構成された。

講演の部では、開会にあたり濱田純一総長より「本シンポジウムは、生命科学を学ぼうとする学生の皆さんへの進路選択ガイダンス、研究者同士の異分野交流の場、一般の皆様にも生命科学への関心を持っていただく場という目的を持ち、多様な最先端の生命科学研究を行う本学において、生命科学全般について部局を横断する形で集まりは他に例がなく、生命科学ネットワークだからこそ開催出来る催しである」とのご挨拶をいただいた。引き続き生命科学ネットワークを構成する16部局のうち8部局の研究者にご講演いただいた。



開会の挨拶をされる濱田総長

今回の講演では、「ナノエレクトロニクスと生命科学～“ゆらぎ”がつなぐ電子物性と生命科学～」と題した工学系研究科・田畑仁教授の講演、「生命現象と自由」

と題した人文社会系研究科・一ノ瀬正樹教授の講演、「優生主義と婚姻～戦前日本を素材にして～」と題した法学政治学研究科・大村敦志教授の講演、「パーソナルゲノム医療の実現をめざして」と題した医学系研究科・辻省次教授の講演、「迅速な適応性～昆虫の学習と進化ゲーム～」と題した総合文化研究科・嶋田正和教授の講演、「マテリアルを認識するペプチド」と題した先端科学技術研究センター・芹澤武准教授の講演、「海の砂漠における窒素固定」と題した農学生命科学研究科・古谷研教授の講演、「ゲノム情報発現抑制とエピゲノム制御の分子機構」と題した分子細胞生物学研究所・加藤茂明教授の講演が行われ、生命科学の最先端の講演に受講者も熱心に聞き入っていた。講演後には質疑応答の時間が設けられ、それぞれ活発な質疑応答等が行われた。参加者アンケートにおいても「最先端の生命科学研究に触れることができ、大変勉強になりました」との意見が多く寄せられるなど、非常に広範な生命科学のエッセンスを楽しんでいただけたと感じる。最後に、山本正幸生命科学ネットワーク長の、「次回は、今回講演のなかった8部局の講演を行う予定ですので、またいらしてください」との閉会の挨拶で、講演の部は盛況のうちに終了した。



講演の部閉会の挨拶をする山本ネットワーク長

また、安田講堂ロビーには、16部局の紹介ブースが設置され、パンフレットや成果物集などが展示された。特に学生の方々から、「大学院進学の参考になりました」という感想が寄せられ、用意したパンフレットの山がなくなってしまいうブースが出るほどの賑わいをみせていた。



賑わう部局紹介ブース

講演の部終了後には、学内研究者・学生によるポスターセッションを開催した。今回は、各部局から291題の演題登録があり、3つの会場全てにおいて活発な議論が繰

り広げられていた。アンケートにおいても「とてもいい刺激になりました」、「様々な研究分野を見ることができて興味深かったです」との意見が多く寄せられ、このシンポジウムをきっかけとして、異なる分野、異なる所属の研究者・学生間の交流の芽が生まれたことを強く実感した。



ポスターB会場（工学部2号館フォーラム）

18時からは、生協第二食堂において懇親会が開催され、歓談に華が咲き、盛況のうちにシンポジウムは終了した。

今回のシンポジウムは、ゴールデンウィーク期間中の開催にもかかわらず、非常に多くの方々にご来場いただき、また、アンケートでは、回答者の82%から「次回もシンポジウムの企画を希望する」との回答をいただいた。生命科学ネットワークでは、今後も、本シンポジウムが生命科学研究者間の横断的な交流や、学部学生の進路選択、一般の方々に関心を持っていただく場として提供出来るよう、積極的に取り組んでいきたいと考えている。

シンポジウムのホームページ

(<http://www.todaibio.info/>)にて当日配布した講演プログラムと同等の講演紹介がご覧いただけます。また、ポスター発表要旨集のPDFファイルをダウンロード出来ます（学内限定）。



総括プロジェクト機構 航空イノベーション総括寄付講座

東京大学・ボーイング 航空と環境
ワークショップ開催報告

5月19日（水）、山上会館2階大会議室において、航空イノベーション総括寄付講座（以下CAIR）とボーイング・カンパニー（以下B社）との共催により、「航空と環境ワークショップ（Aviation Environmental Workshop）」が開催された。これは、日米両国の政府、企業、研究機関の専門家を招き、航空に起因する騒音と排出ガスによる環境負荷を低減するための最新の技術的知見について理解を深めることを目的に開催されたもので、当日は、定員90名のところ、100名を超える参加があった。

冒頭、松本洋一郎理事（副学長）並びにMike Dentonボーイング・ジャパン社長のご挨拶で開会し、午前の部は鈴木真二教授（CAIR代表。工学系研究科 航空宇宙工学専攻）の司会の下進められた。B社のAnthony Blackner氏からはボーイング787の最新の環境技術について紹介があり、FAA（Federal Aviation Administration）のDaniel Hanlon氏及びNASAのFayette Collier氏からは、それぞれで進められている取り組みやプロジェクトについて紹介があった。

午後の部は、岡野まさ子特任准教授（CAIR）の司会で進められ、JAXAの柳良二氏及び李家賢一教授、渡辺紀徳教授（工学系研究科 航空宇宙工学専攻）から、環境負荷低減のためのエンジンや機体の研究開発について紹介があり、国土交通省航空局の清水哲氏からは、CO₂削減のための国際的枠組みや日本の取り組み等が紹介された。

続くパネルディスカッションでは、同航空局の松永博英氏より、日本の空港環境対策の概況が紹介された後、FAAのHanlon氏と鈴木教授の進行の下、JALの中島陸博氏、ANAの佐々木徹氏、JAXAの西澤敏雄氏、B社のBelur Shivashankara氏を新たに迎えて、それぞれの立場から、いかに環境負荷を低減するかについて熱のこもった議論が行われた。

最後に、B社Shivashankara氏と鈴木教授から閉会の挨拶があり、盛況の中閉幕となった。



Mike Denton ボーイング・ジャパン社長ご挨拶



FAA Daniel Hanlon氏講演



パネルディスカッション

※詳細は、学生相談ネットワーク本部のホームページを御参照ください。→ <http://dcs.adm.u-tokyo.ac.jp/>



質疑応答

学生相談ネットワーク本部
学生相談ネットワーク本部主催講習会「心をつなぐ工夫」(第1回)を開催

平成22年度学生相談ネットワーク本部主催講習会『心をつなぐ工夫』－「第1回：学生対応に配慮が求められるとき」が、5月21日(金)、本郷キャンパス薬学系総合研究棟10階大会議室において開催された。

始めに学生相談所長の倉光修教授による講義「カウンセリングのエッセンスを教職員の仕事に生かす工夫」が行われ、引き続き、学生相談所の吉村麻奈美助教、今泉すわ子助教、林潤一郎助教、企画室長の亀口憲治特任教授が加わり、模擬事例等を参考に学生対応の演習が行われた。全学12部局から27名(教員4名、職員23名)の受講者が参加し、活発な質疑応答が行われ、学生対応への関心の高さがうかがえた。

学生相談ネットワーク本部では、従来から本学教職員に対して学生のメンタルケア能力修得を目的とした講習会を実施している。本年度は、「心をつなぐ工夫」に焦点を当て、毎回異なるテーマを設けて5回開催する。

学生と接する機会のある“教員”及び“職員”のみならず、学生対応に関心のある教職員のみならず、是非御参加ください。

【平成22年度講習会実施日程】

- (1) 5月21日(金) … 本郷キャンパス
「学生対応に配慮が求められるとき」
- (2) 6月1日(火) … 本郷キャンパス
「発達障害がありそうな人への理解を深める」
- (3) 6月15日(火) … 駒場Ⅰキャンパス
「駒場キャンパスの大学生・大学院生の特徴」
- (4) 10月19日(火) … 駒場Ⅱキャンパス
「大学院生の特徴」(仮)
- (5) 10月27日(水) … 柏キャンパス
「学生は学生相談所・精神科をどう利用しているか？」



学生対応の演習

本部留学生・外国人研究者支援課
「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成22年度4月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催

5月25日(火)16時、「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成22年度研究奨励費受給者証書授与式」が、田中明彦理事(副学長)、小島憲道理事(副学長)臨席の下、御殿下記念館研修室で開催された。

本奨学制度は、「大学院において特に優秀な私費外国人留学生に対し研究奨励費を支給することにより、本学での学術研究への取組を支援するとともに、諸外国からの優秀な留学生の受入促進に資する」ことを目的として、平成16年度から実施されているもので、月額15万円が標準修業年限の最終月まで支給される。

本年度4月期は、修士課程12名、博士課程34名、専門職学位課程1名の合計47名の大学院学生が受給者として決定され、出席した40名の受給者に田中理事(副学長)から受給者証書が手渡された。



東京大学外国人留学生特別奨学制度受給者証書授与

次いで、田中理事（副学長）から「受給者の皆さんは、本制度を受給されることを誇りに思い、学業や研究に専念してください。教職員は多いに期待しています。」との挨拶があった。引き続き、受給者を代表して大学院総合文化研究科修士課程のモン ミャツ テュさん（ミャンマー）から、感謝の意を表するスピーチがあった。

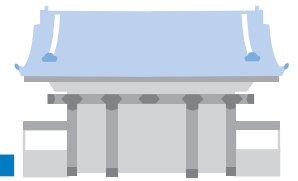


平成 22 年度 4 月期研究奨励費受給者と関係者

<問い合わせ先>

国際部 留学生・外国人研究者支援課生活支援チーム
内線 22732

部局 ニュース



大学院理学系研究科・理学部



部局

教職員と留学生・外国人研究者との懇親会

3月16日(火) 18時から本郷キャンパス内にあるスカイレストランブルークレール精養軒で大学院理学系研究科・理学部の教職員と留学生・外国人研究者との懇親会が開催され、留学生・外国人研究者とその家族、及び教職員で合わせて約70名の参加があった。会はこの日のために練習を重ねてきたスタッフと日本人の学生による「スリラー」のダンスパフォーマンスで華やかに始まり、山形俊男研究科長の英語による歓迎の挨拶と乾杯の音頭の後、料理や飲み物を手に歓談となった。そして、来賓・理学部教職員の紹介の後、中国からの留学生ワン・イン(Wang Yin)さんによるスピーチが日本語で行われ、後輩へのアドバイスを含む博士号取得までの自身の留学生活への想いが語られた。フランスからの留学生 David Casenoveさんと富田武照さんによるオリジナリティー溢れる漫才に会場は大いに沸き、全員参加のゲーム(クイズヘキサゴン)ではチーム戦を通して参加者同士の交流が深まった。また、在日インドネシア留学生協会東京大学支部のメンバーによるアンクルン(竹製のインドネシア伝統楽器)の演奏では「鳥唄(しまうた)」が披露され、自然の楽器が奏でるやさしい音色とギターハーモニーにみな聞き入った。最後に村尾美緒国際交流委員長の温かく心こもった閉会の挨拶と全員の記念撮影で終了し、参加者の協力と積極的な参加により大変楽しく、和やかな時間を過ごすことが出来た。



スリラー!



一緒にポーズ



全員で記念に

大学院薬学系研究科・薬学部
先端創薬棟の竣工式および寄贈式を開催

大学院薬学系研究科・薬学部は、3月19日(金)、学内外関係者出席のもと、先端創薬棟2階にて先端創薬棟の竣工式および寄贈式を開催した。

本建物は、エーザイ株式会社の寄贈を受けて建設されたもので、鉄骨ALC構造、地上3階建、建築面積113.12㎡、延床面積336.7㎡である。

午前の竣工式には、エーザイ株式会社から吉松賢太郎常務執行役をはじめとする関係者、本学からは杉山雄一薬学系研究科長および関係者、ならびに設計、施工を担当された各社の関係者、30名が出席し、神事、直会が滞りなく行われた。

午後の寄贈式には、エーザイ株式会社から内藤晴夫代表執行役社長、吉松賢太郎常務執行役および関係者、本学からは柴崎正勝教授、杉山雄一薬学系研究科長をはじめとする関係者とあわせて28名が出席した。

はじめに、内藤社長から柴崎教授へ目録の贈呈が行われた。その後、杉山薬学系研究科長から、内藤社長へ感謝状が贈呈された。

式典終了後、会場を先端創薬棟1階に移し、懇親会を開催した。終始和やかな雰囲気にもまれて、16時過ぎに散会した。



エーザイ株式会社代表執行役社長 内藤晴夫氏から目録を贈呈される柴崎正勝教授



寄贈式における参加者による集合写真

地震研究所
中間成果報告会「ここまでわかった首都直下地震」を開催

4月23日(金)に安田講堂で平成19年度から5年間の計画でスタートした文部科学省委託研究「首都直下地震防災・減災特別プロジェクト」の中間成果報告会を開催した。

南関東地域で発生するマグニチュード7程度の地震が今後30年間で発生する確率は70%程度と予測され(地震調査研究推進本部)、また、首都直下地震の一つである東京湾北部地震が発生すると最大で死者数約11,000人、経済的被害約112兆円と想定されている(中央防災会議)。このように首都直下地震は、切迫度が高く、被害も甚大なものであるが、大都市での地震観測の難しさと同地域での地下構造の複雑さのため、地震像の詳細は明らかになっていない。一方で、最近の都市の発展によって出現した高層ビル等への新たな災害も指摘されている。さらに首都圏における大災害は、都市の規模が大きいため、防災復旧対策が多岐にわたる。そこで、このプ

プロジェクトでは、理学、工学、社会科学が連携して、首都直下地震の全体像を解明するとともに、地震発生による被害の軽減と首都機能の維持に役立てる研究を行っている。

この中間成果報告会は、現在までの成果を一般の方々に紹介し、今後2年間の研究に活かすための様々な要望や意見をいただくことを目的とした。当日は生憎の雨模様であったが、約600名の参加者があった。報告会は二部構成で行った。第一部では平田直（地震研究所長）、中島正愛（防災科学技術研究所兵庫耐震工学研究センター長）、林春男（京都大学防災研究所巨大災害研究センター長）の3氏から理学、工学、社会科学それぞれの立場から研究成果の報告があった。第二部では第一部の報告に対する会場からの質問を中心にパネルディスカッションを行った。当日の配布資料、一般の方々からの質問は、下記のウェブページからも閲覧できる。

<http://www.eri.u-tokyo.ac.jp/shuto/seika.html>



平田直教授による講演



パネルディスカッションの様子

医学部附属病院
合同就職説明会（新宿NSビル）で看護師募集活動を実施

医学部附属病院では、看護師募集活動の一環として、4月29日(木・祝)に新宿NSビルにて開催された(株)ディスコ主催の「2011 看護ナビフォーラム（合同就職説明会）」に参加した。

各医療機関の看護師募集活動の時期が年々前倒しになる傾向が強まっており、本院も4月開催の本説明会に参加した。当日は1,400名を超える看護学生が会場に集まり、そのうちの約300名が本院のブースを訪れ、対応した本院職員は休憩に入ることも困難なほどの盛況ぶりだった。

学生たちへの対応は、小見山智恵子看護部長をはじめ、中島勸准教授（看護職員採用推進本部長）、看護職員及び事務職員が、訪れた学生一人一人に対し本院の魅力について丁寧に説明した。それに対して多くの学生たちから積極的に質問が寄せられ、本院への関心の高さを肌で感じるとともに、熱心に説明に耳を傾けている学生たちの姿がとても印象的だった。また、自分たちと年齢の近い本院の若手現役看護師の声を直接聞くことができたこともあって、学生たちからは大好評だった。

年々看護学生たちの本院への関心が高まっていることがひしひしと感じられ、平成18年度より本格的に開始した募集活動の効果が確実に現れていることを実感した次第である。

今後、本院は全国の看護学校等を訪問したり、7～8月にインターンシップ・病院見学説明会を実施して、看護学生たちに本院の魅力を最大限にアピールするなど、積極的に募集活動を行っていきたいと考えている。

THE UNIVERSITY OF TOKYO HOSPITAL
2011 看護職員募集

合同就職説明会
4/29・7/18

インターンシップ
病院見学説明会
7/21・23・28・30
8/4・6

第1期採用試験
9/3・4・10・11
9/12

第2期採用試験
12月中旬

東京大学医学部
附属病院
〒113-8505 東京都文京区湯島7-3-1
看護課
03-5800-6520

東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO
<http://www.h.u-tokyo.ac.jp/nurse>

看護職員募集ポスター



合同就職説明会の様子

地震研究所

Silver Award at World Media Festival!
(国際映像祭銀賞受賞!)

2008年度に制作協力した『THE LABO～研究所の歴史に見る科学の系譜～』（サイエンスチャンネル）が英訳ののちにドイツの国際映像祭に出品され、銀賞を受賞した。（全体監修：辻宏道准教授（当時）、英文監修：多田利恵技術補佐員、出演：大久保修平前所長、卜部卓准教授、中谷正生准教授、金沢敏彦教授（当時）、田中宏幸准教授、平田直所長、他。）

『THE LABO～研究所の歴史に見る科学の系譜～』は、歴代の研究者達の業績を紹介し、その歴史と発展の日々を追うことで科学の系譜を紹介するチャンネル。そのシリーズのひとつとして地震研究所が取り上げられた。1923年の関東大震災を契機に創立された地震研は今秋に85周年を迎える。創立当時からの変わらぬ精神は、地震研究所研究員だった寺田寅彦博士による碑文に伺うことができる。「本所永遠の使命とするところは、地震に関する諸現象の科学的研究と、直接または間接に地震に起因する災害の予防並びに軽減方策の探究とである」。

番組では地震研の辿った歴史と最先端の研究とが紹介されている。

サイエンスチャンネルのウェブサイトから上記タイトルで検索することで誰でも閲覧可能です。ぜひご覧ください。

<http://sc-smn.jst.go.jp/index.asp>

大学院教育学研究科・教育学部

国際交流室リニューアル記念フォーラム・留学生懇談会開催

5月12日(水)に国際交流室リニューアル記念フォーラムおよび留学生懇談会を開催した。同フォーラムは、恒吉僚子教授の総合司会により進行し、武藤芳照研究科長から教育学研究科における国際化への取り組みと今後の展望が述べられ、続いて国際交流委員会委員長の多賀巖太郎教授により、同研究科の国際化体制ならびに事業紹介の報告が行われた。

続いて学生による国際交流活動報告が行われた。毎年恒例の留学生修学旅行に参加した経験を邱 潔（きゅう・けつ）氏（大学経営・政策コース）が報告し、中国・華東師範大学教育科学学院との学術交流プログラムにおける研究発表に関する報告を中園有希氏（教職開発コース）が行った。さらに前年度より開始した研究科独自の大学院国際学術研究支援制度を利用した坂本篤史氏（教育心理学コース）が、香港で開催された国際学会発表の報告を行った。

フォーラム後半では、国際交流室担当委員の中釜洋子教授の進行により、教育学研究科における国際化教育の現状と今後の課題に関して学生による報告がなされた。留学生代表として姜 露（きょう・ろ）氏（教育心理学コース）により、同研究科における留学経験によって築いた関係は、異文化の壁を越える絆となり、コース間の学際的交流や留学生・在学生間の交流による今後の発展への期待が述べられた。在学生代表として山本貴之氏（比較教育社会学コース）が、国際交流室を国際学術交流の拠点として位置付ける必要性を示すとともに国際的に活躍する若手研究者養成を目的とする支援プログラムの提案を行った。続いてディスカッションでは、学生を中心に今後の国際交流活動に向けて期待や要望が述べられた。同フォーラムには、教職員21名、在学生12名、留学生18名の計51名が出席した。

留学生懇談会は、4月に着任した太田有子特任助教（国際交流室）の司会により進行し、研究科長による乾杯の挨拶、歓談の後、国際交流室のスタッフ紹介や新入留学生紹介が行われた。教育学部附属中等教育学校長の今井康雄教授より、国際交流授業担当教諭の紹介とともに、担当教諭から留学生の授業見学や参加の案内があり、外国人特任教員及び客員教員の挨拶が続いた。同研究科における国際性や国際化教育の進展を改めて共有する場となった。閉会の辞として総合教育科学専攻長の川本隆史教授より留学生への期待と未来への展望が語られた。同

会には、教職員 30 名、留学生 22 名、在学生 12 名の計 64 名が出席した。



フォーラムで挨拶する武藤芳照研究科長



在学生代表としてスピーチする山本貴之さん



フォーラムを終えて

大学院情報理工学系研究科、産学連携本部
東京大学コンソーシアム「東大グリーン ICT プロジェクト発足会 (グリーン東大工学部プロジェクト成果発表会)」開催される

我が国は 2020 年の地球温暖化ガスの削減目標を 1990 年比で 25% 削減することを国際的な公約としており、環境・エネルギー分野における世界的リーダーシップと先端技術を核とした国際競争力の向上、地球と人類への貢献を行うことを最重要課題の一つと位置付けている。このような地球的規模の課題解決へ向けて、東京大学は、IT および IT を用いた省エネのための研究と技術開発を行い、省エネ技術の実用化によって、温暖化ガスを制御し、地球環境保護に資することを目的として 2008 年 6 月に設立された工学部の「グリーン東大工学部プロジェクト」の成果をもとに、「東大グリーン ICT プロジェクト」を全学コンソーシアムとして設置・運営することとした。

5 月 12 日(水) 14 時 30 分より、本郷キャンパス工学部 2 号館 4 階 241 講義室にて、「東京大学コンソーシアム 東大グリーン ICT プロジェクト発足会 (グリーン東大工学部プロジェクト成果発表会)」が開催された。

本プロジェクトは 32 企業、13 団体の 45 組織から構成された産学連携型コンソーシアムであり、参加企業は ICT 機器のベンダー、建設会社、総合電機会社、情報家電会社、セキュリティサービス会社、ビル管理会社などで、川上から川下まで関連する企業が研究開発の情報を共有し、マルチベンダー環境で動作可能なファシリティシステムの研究開発を目指している。

冒頭、プロジェクトの代表である江崎浩教授 (情報理工学系研究科) より、「させられる環境対策からやりたくなる環境対策へ」をキャッチフレーズにしたプロジェクトの簡単な成果発表があり、「グッドデザイン賞」(2008 年 10 月)「グリーン IT アワード 2009 審査員特別賞」(2009 年 10 月)「グリーン IT ユーザアワードプロジェクト賞」(2009 年 10 月) を受賞したことのほか、全学コンソーシアムに移行することが伝えられた。その後、詳細な成果が、コンセプト WG、見える化 WG、制御 WG、実証実験 WG、プロトコル標準化 WG の各主査より発表された。発表会終了後、テクニカルサイトツアーが開催され、「電子掲示板」「TSCP 室の実証」「人感センサによる室内照明制御」「ネットワーク型空調省エネサービス」「カメラによる電力量計測通信システム」などが紹介された。

参加者は今後プロジェクトに参加を考えている企業の方が多く、熱心にメモをとって聞き入る姿が目立った。

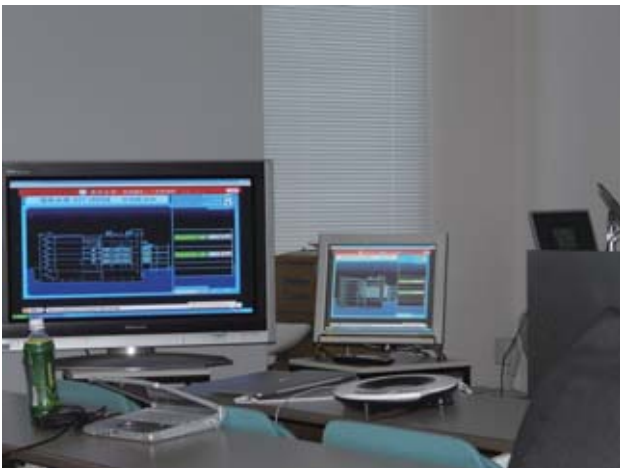
本プロジェクトは、世界最高のコストパフォーマンスと技術レベルを誇るブロードバンドとでデジタルの基盤を最大限効果的に活用した最先端のシステムを構築し、世界の大都市へ模範を示すべく学内施設を実フィールドとした実証モデルを構築しつつある。この実証試験フィールドでの成果を公共施設等への展開、さらには新

たなビジネス領域の創造に資する研究成果を目指し、省エネのための個別技術の統合化と完全性確立に向けて新たな段階に入りつつある。

2010年度以降は、引き続き現在の参加組織と、新規に参画する組織によって、産学連携コンソーシアムを組織化し、テストベッドを用いた先端技術の研究開発と統合環境での実践的運用を通じた技術の評価と運用技術の確立を推進するとともに、国内外での技術の標準化活動を展開する。また、工学部2号館を用いたテストベッド運用においては、工学部の施設担当および財務担当との連携も行い、実務に直結した運用技術の確立を行うこととしている。



活動報告を熱心に聴講する参加者



テクニカルサイトツアーで紹介された電子掲示板。日本語、英語、中国語での表示が可能で、右側のタッチパネルで操作できる

大学院法学政治学研究科・法学部

新入生歓迎会、外国人留学生等との懇談会を開催

5月20日(木) 18時から、山上会館1階談話ホールにて法学政治学研究科総合法政専攻の新入生歓迎会および法学政治学研究科による外国人留学生等との懇談会が合同で開催された。

ゲストの学生、客員教授、客員研究員、日本人学生

チューター、教職員等、総勢119名が出席し、熱気あふれるパーティとなった。

久保文明教授(綜合法政専攻長)の司会進行で、山下友信研究科長の挨拶、西川洋一副研究科長による乾杯の後、歓談に入った。

宴たけなわになった頃、学生の代表として綜合法政専攻博士課程1年生の田中佐代子さんが、研究者としての自覚が芽生えた体験談を披露した。次に、同専攻博士課程1年生の高鉄雄さん(韓国出身)が、学問と結婚することについて民法的観点からスピーチを行った。最後に、同専攻修士課程1年生のヴィオレッタ・ウドヴィクさん(ウクライナ出身)が、流ちょうな日本語で受験を控えている研究生たちにエールを送った。

いつも学業に忙しい学生たちだが、この日ばかりは教員や友人と大いに親睦を深め、和やかな雰囲気のなか20時に散会した。



(写真左から) 久保教授、高さん、田中さん、ヴィオレッタさん、山下研究科長



博士1年 田中 佐代子さん



(写真左から) 博士1年 高 鉄雄さん
修士1年 ヴィオレッタ・ウドヴィクさん

東洋文化研究所

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク 第一回東洋文化研究所・ASNET 共催セミナーを開催

5月19日(水)に東洋文化研究所1階ロビーにおいて、同研究所と日本・アジアに関する教育研究ネットワーク(ASNET)との共催セミナーが開催された。

当日は教員から学生も含めて約30名が集まる中、日本学術振興会外国人特別研究員の金氣興氏が「持続可能な開発における有機農業の役割－日本と韓国を中心に－」というタイトルで研究発表を行った。

このセミナーは、日本・アジアに関する教育研究ネットワークが、若手研究者に発表の場を提供することで研究者同士の交流を促進させることを目的に企画したものである。今回は第一回目ということで、東洋文化研究所と共催して、同研究所の1階ロビーで行われた。

また、研究発表に合わせて、池本幸生副ネットワーク長からコーヒーや果物が振る舞われ、和やかな雰囲気のもとで日本と韓国の有機農業の状況について活発な討議が行われた。

日本・アジアに関する教育研究ネットワークでは、同種のセミナーを週1回程度の頻度で定期的開催する予定であるので、ご興味のある方はホームページをご覧ください。

日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
<http://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/>



発表者の金氣興氏



セミナー風景

大学院総合文化研究科・教養学部

グローバル地域研究機構設立記念式典が挙行される

5月22日(土)、駒場Iキャンパス18号館オープンスペースにおいて、大学院総合文化研究科附属グローバル地域研究機構設立記念式典が挙行された。

グローバル地域研究機構(Institute for Advanced Global Studies: IAGS)は、本年4月1日に本研究科の附属施設として設立されたものであり、この機構IAGSには、従来から本研究科の附属施設であるアメリカ太平洋地域研究センターとドイツ・ヨーロッパ研究センターが移行するとともに、新たにアフリカ地域研究センター、持続的開発研究センター、持続的平和研究センターが設置された。IAGSは、当面これら合計5センターの複合体として活動していくこととなる。

式典では、古矢旬機構長の開会の辞の後、山影進研究科長から挨拶があり、引き続いて、油井大三郎名誉教授(元アメリカ太平洋地域研究センター長)の発声で乾杯が行われた。

また、オーストラリア大使館リチャード・アンドリュース公使をはじめとする各センターの関係来賓による祝辞をいただき、学内外の50余名に及ぶ方々とともに機構設立を祝い、祝宴は盛会のうちに閉会した。

なお、当日は式典に先立ち、関係者による看板除幕式が行われた。式には、山影研究科長、石井洋二郎副研究科長、古矢機構長をはじめ学部内関係者30名が出席し、14号館正面玄関に新たに設置された「グローバル地域研究機構」看板の除幕が行われた。



看板除幕式に出席する山影研究科長、古矢機構長他

史料編纂所

部局

日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催

5月24日(月)、史料編纂所(榎原雅治所長)では、ロシア連邦サンクト・ペテルブルグ市からロシア国立歴史文書館長らを招聘し、「日露関係史料をめぐる国際研究集会」を開催した(日本学士院との共催)。

研究集会では下記4本の報告があり、いずれもロシア側の一次史料や所蔵品にもとづく話題になっている。

第一報告にたったロシア科学アカデミー人類学民族学博物館(クンストカーメラ)のアレクサンドル・シニーツィン上級研究員は、19世紀初頭日露間の北方紛争においてロシア側が接収した日本品のリストと現在残る所蔵品について報告した。日本側が使用した大砲類も分捕られ、ロシア皇帝の裁可を経て、現在サンクト・ペテルブルグに所在するという。接収された大砲や武器、調度品などが画像で紹介されると、会場にはどよめきがあった。

第二報告にたったロシア科学アカデミー東洋古籍文献研究所のワジム・クリモフ上級研究員は、1862年にロシアを訪問した竹内使節団の歓迎式典について、ロシア側の史料を駆使して詳細な検討をおこなった。また第三報告、ロシア国立歴史文書館のアレクサンドル・ソコロフ館長は、同文書館が所持する儀典事務部の関係史料を駆使し、1873年にロシアを訪れた岩倉使節団について報告した。

第四報告は、ロシア国立海軍文書館セルゲイ・チェルニャフスキー館長から、1900年北清事変における列強海軍の共同作戦に関して発表があった。海軍文書館が所蔵する史料に基づき、日露戦争のわずか数年前、中国の大沽要塞の攻防をめぐって海軍の共同作戦がおこなわれていた。東郷平八郎をはじめ数十名の日本人将校がロシア側の褒章に推挙されたという。

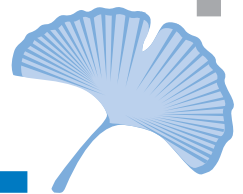
当日は全国から約60名の参加者があり、画像で紹介された品々やロシア史料の読み方、論点をめぐって活発な質疑がおこなわれた。

この研究集会は、日本学士院による国際学士院連合関連・日本関係未刊行史料調査事業の一環として行われた。文書館長らは集會に先立って、プロジェクト代表者の保谷徹教授とともに日本学士院を訪問し、久保正彰院長(本学名誉教授)と親しく懇談した。また、集會終了後は、奈良文化財研究所(田辺征夫所長)・宮内庁正倉院事務所(杉本一樹所長)などを訪問し、日本の古代史料とその保存状況についてレクチャーをうけるなど、日露の研究交流につとめた。



報告するチェルニャフスキー館長(史料編纂所にて)

キャンパス ニュース



本部学務課

キャンパス

平成22年5月1日現在学生数
—学部学生 14,172人、大学院学生
13,820人、研究生等 853人—

本学では、毎年5月と11月の年2回、同月1日現在の学生数を調査し「学内広報」に掲載している。本年5月1日現在の学生数は次のとおりである。

平成22年5月1日現在 学部学生・研究生・聴講生数調

種別 入進学 年度別 性別	在籍者												外国人学生及び休学者 (再掲)						研究生			外国人 (再掲)			聴講生											
	平成22年度			平成21年度			平成20年度 (以前)			平成19年度			平成18年度 以前			小計			合計			男	女	計	男	女	計	男	女	計						
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計															
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計												
	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計	男	女	計									
前期課程・教養学部	2,551	605	2,552	589	244	29													112	59	171	15	6	21	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
法学部	344	82	328	95	168	45													16	8	24	26	8	34	—	—	—	—	—	—	—	—	—			
医学部	84	16	85	17	85	15	81	17	17										6	0	6	9	2	11	19	11	30	0	0	0	—	—	—			
健康総合科学科	9	14	11	5	0	4										20	23	43	0	1	1	0	0	0	0	0	0	—	—	—	—	—	—			
工学部	902	101	901	83	167	11										1,970	195	2,165	63	18	81	30	5	35	25	12	37	10	6	16	10	2	12			
文学部	260	102	251	123	132	58										643	283	926	10	4	14	48	18	66	0	3	3	0	0	0	—	—	—	—	—	—
理学部	275	35	272	31	53	1										600	67	667	14	5	19	11	0	11	3	0	3	0	0	0	5	1	6			
農学部	193	56	188	49	39	2										420	107	527	10	3	13	6	1	7	4	0	4	1	0	1	0	0	0			
	17	15	17	16	18	16	20	11	4	1	4	1				76	59	135	1	1	2	2	0	2	0	0	0	0	0	0	—	—	—			
経済学部	297	54	299	54	85	18										681	126	807	14	11	25	18	7	25	—	—	—	—	—	—	2	0	2			
教養学部	108	60	121	57	53	29										282	146	428	9	4	13	16	5	21	6	3	9	1	0	1	0	1	1	11	17	28
教育学部	56	45	61	44	25	8										142	97	239	3	2	5	7	3	10	6	2	8	0	0	0	—	—	—	—	—	—
薬学部	68	23	56	23	1	0										125	46	171	8	4	12	1	1	2	5	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
			6	2	5	2	0	0	0	0	0	0				11	4	15	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0			
小計	2,613	603	2,596	599	831	209	101	28	21	1	6,162	1,440	7,602	154	61	215	174	50	224	68	31	99	12	6	18	40	22	62								
合計	5,164	1,208	5,148	1,188	1,075	238	101	28	21	1	11,509	2,663	14,172	266	120	386	189	56	245	68	31	99	12	6	18	40	22	62								

備考) 1. 農学部の上段は獣医学課程を除く各課程の合計数を、下段は獣医学課程の数を示す。
 2. 薬学部の上段は薬学科(6年制)を除く各課程の合計数を、下段は薬学科(6年制)の数を示す。
 3. 平成20年度(以前)の欄については、医学部医学科・農学部獣医学課程・薬学科(6年制)は平成20年度入進学者のみ、他の学部学科は平成20年度以前の入進学者を示す。

平成22年5月1日現在 大学院学生・研究生・外国人研究生数調

種別 課程別 入進学 年度 性別	在籍者												在籍者のうち												在籍者のうち												大学院		特別 研究生					
	修士						博士						外国人学生(再掲)						外国人学生(再掲)						外国人学生(再掲)						院 生		特 別 研 究 生											
	22年度		21年度		20年度		19年度 以前		小計		合計		修士(専門職 学位)課程		修士(専門職 学位)課程		修士(専門職 学位)課程		修士(専門職 学位)課程		修士(専門職 学位)課程		院 生		特 別 研 究 生																			
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女																
人文社会学系	80	48	65	59	35	27	180	134	314	46	36	44	34	53	31	150	115	293	216	509	823	19	27	31	49	126	19	15	94	74	202	28	29	57	8	3	11	2	0	2				
教育学	44	47	53	39	11	8	108	94	202	22	25	29	30	27	18	48	65	126	138	264	466	4	10	3	32	49	7	5	29	47	88	2	10	12	1	11	12	1	0	1	1			
法政学	11	7	10	10	1	0	22	17	39	7	6	11	10	8	11	25	23	51	50	101	140	11	14	14	14	25	64	0	0	9	16	25	10	10	20	0	0	0	0	0	1	0	1	
法学部	[159]	[70]	[181]	[89]	[61]	[63]	[401]	[222]	[623]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	[623]	[6]	[5]	-	-	[11]	[5]	[5]	-	-	[10]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
経済学	67	16	49	9	16	3	132	28	160	13	3	25	5	17	4	38	13	93	25	118	278	16	14	4	4	38	9	2	30	10	51	2	2	4	6	0	6	0	0	0	0			
総合文化	135	98	139	96	48	47	322	241	563	93	49	104	66	82	69	181	150	460	334	794	1,357	21	50	57	87	215	22	30	111	91	254	12	30	42	11	4	15	8	6	14				
理学系	295	59	298	58	24	3	617	120	737	142	24	140	37	125	29	85	25	492	115	607	1,344	25	7	23	11	66	10	3	13	6	32	1	2	3	9	4	13	7	5	12				
工学系	785	94	838	120	159	38	1,782	252	2,034	177	26	307	70	219	61	186	42	889	199	1,088	3,122	237	97	331	114	779	59	1	48	18	126	84	40	124	12	4	16	21	9	30				
原子力	[16]	[2]	[2]	[2]	[18]	[0]	[18]	[0]	[18]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	[18]	[0]	[0]	-	[0]	[0]	[0]	-	-	[0]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
農学	200	101	201	97	23	5	424	203	627	70	56	82	57	75	33	60	24	287	170	457	1,084	25	35	58	84	202	8	3	15	16	42	10	11	21	6	6	12	5	5	10				
生命科学	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	17	12	15	7	13	5	9	5	55	33	88	88	-	-	10	16	26	-	0	2	2	2	2	1	0	1	9	7	16	0	0	0		
医学	-	-	-	-	-	-	-	-	-	138	65	122	54	137	59	107	62	542	261	803	803	-	-	43	32	75	-	-	35	23	58	5	1	6	0	0	0	0	19	8	27			
保健学	14	41	11	44	2	10	27	95	122	12	25	9	36	13	27	3	23	37	111	148	270	8	26	11	23	68	3	11	3	23	40	4	3	7	1	5	6	0	0	0	0			
医学系	16	11	14	9	1	1	31	21	52	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	52	0	2	-	-	2	1	1	-	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0		
公共健康学	[14]	[6]	[6]	[9]	[0]	[2]	[20]	[25]	[45]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	[45]	[1]	[3]	-	-	[4]	[0]	[1]	-	-	[1]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
薬学系	67	17	63	35	5	3	135	55	190	42	13	46	14	41	11	12	5	141	43	184	374	3	3	7	9	22	4	4	0	12	3	2	5	4	0	4	0	4	5	3	8			
数理学	41	1	38	1	8	0	87	2	89	26	0	21	1	17	1	4	0	68	2	70	159	8	0	9	1	18	1	0	2	0	3	0	0	1	0	1	0	1	0	0	0	0		
新領域創成科学	324	88	358	114	69	36	751	238	989	87	31	101	36	90	37	84	29	362	133	495	1,484	51	58	64	34	207	11	10	14	13	48	9	18	6	6	12	7	1	8					
情報理工学系	177	11	202	11	30	2	409	24	433	64	6	63	5	72	5	35	4	234	20	254	687	51	12	81	8	152	13	0	17	2	32	24	8	32	3	0	3	7	3	10				
学際情報	54	25	54	34	28	6	136	65	201	20	14	16	20	22	10	35	24	93	68	161	362	24	20	19	27	90	11	4	16	8	39	17	23	40	1	0	1	0	0	0	0			
公共政策学	[69]	[33]	[63]	[34]	[34]	[8]	[166]	[75]	[241]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	[241]	[4]	[5]	-	-	[9]	[10]	[4]	-	-	[14]	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
合計	2,310	664	2,393	736	460	189	5,163	1,589	6,752	976	391	1,135	482	1,011	411	1,101	634	4,223	1,918	6,141	12,893	503	375	765	556	2,199	178	89	440	349	1,056	212	180	392	78	50	128	83	40	123				

備考 1. 専門職学位課程は、〔 〕書きで示し外数である。
 2. 農学生命科学研究科、医学系研究科の下設学生数は、平成18年度以前の入学者を示し、外数である。
 3. 修士及び専門職学位課程の21年度(以前)の欄については、工学系研究科原子力専攻は平成21年度以前の入学者、他の研究科(教育部)の専攻は平成21年度入学者を示す。
 4. 大学院研究生・特別研究生の欄の()内は、外国人を示し内数である。
 5. 外国人学生には在日外国人を含む。
 6. 大学院科目等履修生の数
 大学院研究科の大学院科目等履修生(37人)、法政学政治学研究所(法曹養成)の大学院科目等履修生(8人)、工学系研究科の大学院科目等履修生(0人)、薬学系研究科の大学院科目等履修生(0人)、情報理工学系研究科の大学院科目等履修生(2人)、
 7. 情報学環境教育部研究生(142人)
 大学院特別研究生、大学院科目等履修生の合計である。



PCリユースの

第⑧回 目的は何ですか？

新年度に入り新しい学生さんを迎え、俄かに華やいだキャンパスもようやく落ち着きを取り戻した5月下旬、リユースオフィスでは、今年度初めて学生さんからのリユースPCの希望申請書の受付を開始しました。

この申請書は「身分」「使用希望PC」「PC所有の有無」「使用目的」欄等から成り立っています。オフィスではこれらの内容を採点基準（非公開）により数値化し、総合評価の高い順から希望のPCを割り当てます。リユースPCを用いてどのように研究教育に活用するかを具体的に書く「使用目的」欄は配点のほとんどを占める最重要ポイントです。自らPCを購入できない理由や、就職活動、卒業論文、授業、研究、サークル活動など使用目的をスペースいっぱいびっしり書いてくる熱心な学生さんがいる一方で、大きなスペースに小さな文字で1行だけそっと書いてくる控えめな学生さん、「？」と首をかしげたくなる「珍」回答を書いてくるユニークな学生さんも少なくありません。例えば…

- 「自宅にてレポート作成のため」（えっ、それだけ？）
- 「学校で使用するため」（何に？）
- 「現在PCを所有していないため」（それはそうですが）
- 「×××の研究のため」（研究に優劣はつけられません）
- 一字一句、全く同じ内容が5枚（すぐわかります！）
- 「日本の受験教育を改革するため」（う？…う～ん）
- 「空欄」（…）

指導教員の先生の承諾サインがあっても、これでは残念ながら点数にはつながりません。本当に必要としている学生さんにこそ利用してもらうためにも使用目的欄は欠かすことができないのです。それに、学生さんにとって、今後、就職活動時のエントリーシートや研究者として研究費の申請など、文章力、表現力を試される場面は必ずやってきます。この申請書を近い将来の練習台としてもらえたらという思いもある



学生さんもいろいろ

のです。とはいうものの、どう書けばいいのかわからない学生さんもいるはず。今回は募集要項に詳しい説明を加えることにしました。

さてさて、申請書を通して今回はどんな学生さんに出会えるか、ちよっぴりドキドキワクワクしております。（青）

☆5月各局部ご提供PC☆

情報理工学系研究科 6台 大学総合教育研究センター 1台

以上7台のノートPCは4回目の募集時に利用させていただきます。どうもありがとうございました。引き続きよろしく願いいたします。

- 問い合わせ先：ノートPCリユースオフィス（本部資産管理部資産課内）
E-mail: pcreuse@adm.u-tokyo.ac.jp
URL : http://pcreuse.adm.u-tokyo.ac.jp/
内線：22135(担当 青木・高橋・戸田)
- ノートPC回収先：美津野商事株式会社システム事業部
E-mail: reuse@mizuno.net (担当 川崎・石井)
電話：03-3943-0181 FAX: 03-3943-4180

インタープリターズ・ バイブル

vol. 35



科学技術インタープリター養成プログラム

なぜだろう、なぜかしら 「馬・塊・鉄」編

廣野喜幸

総合文化研究科 准教授
教養学部附属教養教育高度化機構
科学技術インタープリター部門

馬を水辺に連れて行くことはできるが水を飲ませることはできない。

イタリアの科学コミュニケーション研究者ブッキ博士の有名なデータがある。これによると、科学知識に接している時間が長ければ長いほど、正確な知識を得ているわけではない。ということは、強制的に知識を与え続けても科学リテラシーが向上するとは限らない。言われてみれば当たり前だろう。いやいややっても成果は上がらない。自然の知識を得たいと願っている人を相手に、伝え方をいろいろ工夫するのも科学コミュニケーション研究の重要な課題だが、得たいという動機付けをどうすれば促すことができるかは、それ以上に大事である。ところがこれがとてつもなく難しいのです。科学コミュニケーション研究の中でも悩ましい課題の一つになっている。

塊より始めよ。

どうすればより多くの人々が自然の知識を得たいと思うようになるのか。さてよ。私だって自然科学者だ(った)。なんでそうした動機をもつようになったのだろう。と考えているうちに少しずつ思い出してきました。私は浅草で育った。もう存在しないが、小学生時代仲見世に本屋さんが二軒あった。中程にあった店でよくねだったのは(数年後に廃刊になる)月刊漫画雑誌『ぼくら』を毎月買ってもらうのが楽しみだったなあ。雷門寄りの端の店では科学読み物が目当てだった。今も鮮明に覚えているタイトルは『なぜだろうなぜかしら』。学年別に出ている上下巻を、1年上から6年下まで半年ごとに計12巻買いそろえてゆくの、これまた無上の喜びだった。あきずに読み返したものだ。

鉄は熱いうちに打て。

あれだあれだ。雷が電気であること等等、多くの知識を得たのはこのシリーズだ。それが高じて中学生時代には生物部(と卓球部)に所属するようになり、大学院で生物学を専攻するに至ったのだった。だとすると、動機付けの観点からは、幼いうちに良質な科学読み物に接することが、やはりとても大事なのではあるまいか。そう思ってきたものの、こんな臍気な記憶だけでは心許ない。あのシリーズのどこが私をそんなに魅了したのか。まずは実物を見て確かめてみなくては。だが、かつて大事にしていた全12冊は、整理整頓が大好きの父の圧力に屈し、他の「お宝本」とともに捨ててしまった。(返す返すも残念。せめて古本屋に売るべきだった。)さて、どうしたものか。

次回『なぜだろうなぜかしら』を尋ねて三千里編をどうぞお楽しみに。再見！

★科学技術インタープリター養成プログラム

URL: <http://park.itc.u-tokyo.ac.jp/STITP/>

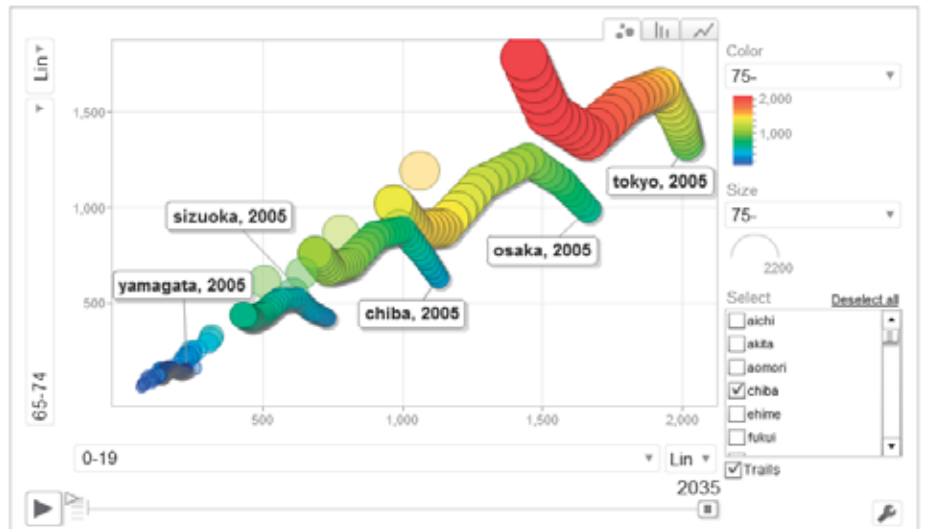
※この連載では、政策ビジョン研究センターが現在最も重要視しているトピックスを中心に、そのときどきのホットニュースを、当センターの取り組みの様子、活動状況など共にご紹介していきます。

動きでわかるデータ

研究を進める上で、データをどのように表現するかという点は、データの質や分析方法と同じく重要な課題です。ITの発達により、様々な興味深いデータの表現手法が登場しています。当センターでもその一つ「Gapminder」と呼ばれるアニメーションを用いて時系列の変化を表現するグラフに注目しています。(右図は、Gapminderと同じ仕組みを提供するGoogle Motion chartを使って作成したグラフ)

Gapminderは、スウェーデン・ストックホルムにあるGapminder財団が提供するサービスで、国際連合などの多くの国際機関や政府機関、NGOと連携しデータの可視化を行っています。Gapminderによるグラフの特徴は、最大4つの変数から時系列のアニメーショングラフを作成する、利用者が簡単にグラフをカスタマイズ出来る(変数を入れ替える、特定のケースだけ追跡する等)とあります。堅苦しいイメージを与える統計データを「楽しく」「美しく」見せることに主眼をおいています。

これまでの図表と異なり、動きのある形でデータを眺めることが出来るので、新しい発見につながっていく可能性があると思われます。一つ考えなくてはいけないのは、これらの発見の良さをいかに伝達するかという点です。アニメーショングラフは、紙面上で再現



Google Motion chartによる2005年-2035年の将来推計人口(政策ビジョン研究センター作成 参考:国立社会保障・人口問題研究所「都道府県別人口および増加率の将来推計」)。縦軸:65-74歳人口、横軸:0-19歳人口、色とサイズ:75歳以上人口にした場合の、都道府県比較データ。経時変化を動画で再生させることができ、選択した地域のみトレースすることが可能。4変数の組み合わせは自由。このアニメーショングラフは、http://pari.u-tokyo.ac.jp/policy/gap_aged2_2005_2035.htmlにて、ご利用いただけます。

するのは困難であり、現在の多くの媒体が紙であることを考えると普及させるためには一工夫が必要だと思います。

Gapminderの創業者の一人であるHans Rosling博士は、アニメーショングラフを使った自らのプレゼンテーションをWebサイトに掲載する取り組みを行っています。また、動画という意味での別の取り組みとして、Journal of Visualized Experimentsは、完全にインターネット上で運営され、実験手法や

流れ、結果について、動画による説明が付属しています。動画を使って視覚的に効率良く伝達しようというのがその狙いです。アニメーショングラフやシミュレーション、情報技術などの解説にもこういった手法は非常に有効な手段になると考えられます。

当センターにおいても、新しい技術の積極的な活用に取り組むと共に、研究知識の普及に関する新しいあり方を広報誌・Webサイトを通じて模索していきたいと思っています。

コラム紹介

当センターHPには多くのコラムが掲載されていますが、今回はそこから以下のコラムをご紹介します。今から20年後の2030年になると、65歳以上の人口の比率は全人口の約1/3に、75歳以上人口は20%になります。しかし数値データの把握とともに重要なのは、年齢以外の属性も踏まえた、高齢者と若者の質的構造転換に関する議論です。このコラムでは、人口数が二分される年齢階級である40~45歳層を現代日本社会の「二分分線」と名付け、これを境に「時代のエートス」の違いも踏まえた、二つの信条政策が必要であるという論が展開されています。

超高齢社会の二分分線

大阪府政策企画部 喜多見 富太郎 氏
企画室統括参事
<http://pari.u-tokyo.ac.jp/column/column22.html>
全文は当センターHPコラムをご覧ください。

…高齢世代と若年世代は同質な社会成員なのか。ここで日本人の生産性にかかわる信条政策というべきものを考えてみたい。信条政策とは、国策的に誘導され社会意識として定着した巨大制度に関する政策といった意味で考えているが、戦前の「富国強兵」のような、「国是」とか、「時代のエートス」というようなものである。

よくいわれるように、戦後日本には、家計の投資支出を誘導する少なくとも三つの信条政策があった。一つは、家計から巨大な教育投資を引き出すための企業における学歴別新卒一括採用慣行と終身雇用制である。学歴神話ともいわれる。二つ目は、国の公共事業を補う家計の住宅投資を呼び込むための持ち家政策である。マイホーム主義ともいわれる。三つ目は、家計の貯蓄性

向を高めるための離島・僻地にまで張り巡らされた郵便局を通じた公的保険制度や都市部を中心とした金融護送船団や都市部を中心とした金融護送船団である。親方日の丸と揶揄されることも多い。こうした巨大制度によって、社会の中間層の家計所得を近視眼的な消費ではなく、長期的な有形無形の投資に振り向けることができた。

しかし興味深いことに、これらの信条政策は、人口の二分分線世代、つまり40歳代前半層の出生期である60年代後半から70年代を境にして形骸化がはじまっている。まず、大学進学率が、1966年の16.1%から、1976年の38.6%へと10年で2倍以上に跳ね上がっている。大学の大衆化は1966年からはじまったとみてよいが、それは、当然、大学教育への期待収益率を低下させる。また時期はやや上がる

が、1962年の区分所有権法の制定が目指される。区分所有権法によって都市部を中心に中高層の集合住宅の「持ち家」化が可能となったが、集合住宅は、経年によって資産価値が償却され、さらに大規模改修費用を伴うマイナス資産となる。投資資産としての実質を伴わない名ばかりの「持ち家」なのである。さらに、社会保険制度も、この時期に積立方式から賦課方式になり崩壊的に転換していき、金融護送船団と対になったメインバンク制度も、70年代には形骸化が始まったといわれている。人口二分分線の前半層、つまり人生の往路にある世代は、生まれた時から信条政策の喪失の危機にあり、後半層、つまり人生の復路にある世代は、自らが生きた信条政策の裏切りにより遭遇しつつある。…

学生発ベンチャーが世界を変える！ 第6期東京大学アントレプレナー道場が開講



初級コース第1回目、水越豊氏(ポストコンサルティンググループ日本代表)の講演を熱心に聞く参加者。初級コースの第3回目、第4回目では、参加学生が4人でチームを組み、実際のビジネス課題に基づいたケーススタディについて話し合い、チームごとに発表した。

4月20日(火)本郷キャンパス 情報学環・福武ホール of 福武ラーニングシアターにおいて「東京大学アントレプレナー道場(学生起業家育成プログラム:以下道場)」が開講しました。本年度は第6期目になります。本プログラムには本学の学生(ポスドクを含む)であれば誰でも参加できます。第6期は5月末時点で既に180名を超える参加登録申し込みがありました。今年度は4月27日に駒場キャンパスで道場のオリエンテーションを行ったこともあり、例年に比べると学部前期課程の学生の参加が多くなっています。

道場は、初級コース(4月~5月)、中級コース(6月~7月)、上級コース(8月末~10月半ば)を経て、ビジネスプラン最終発表審査会・表彰式をもって締めくくりとなります。参加学生が中級コースや上級コースに進むには、チームを組んでビジネスプランを作成し提出しなくてはなりません。審査があつて合格したチームのみが進級できる仕組みになっています。上級コースでは、6~8チームが選ばれますが、各チームそれぞれに社会人指南役である“メンター”が2名つき、ビジネスプランをブラッシュアップするための具体的なアドバイスを提供します。メンターはコンサルタントや、弁護士、監査法人公認会計士などベンチャービジネスに精通している日本を代表するプロフェッショナルの皆さんです。9月には1泊2日の検見川セミナーハウスでの合宿もあります。こうしたプロセスを通してチーム内外のメンバーと親睦を深めることも本プログラムの重要な要素です。最終審査で選ばれた上位入賞チームの学生は、北京で開催される北京大学学生との交流プログラムに参加することができます。自らのビジネスプランを国際的な視点から英語で発表し、討議することを通して更にレベルアップを図ります。

参加してみたい学生の方々は、産学連携本部HPをおたずねください。「アントレプレナー道場ものがたり」をご覧ください。頂くと過去数年間の道場の様子が分かります。道場で皆さんと一緒にできるのを楽しみにしています。

連絡先:産学連携本部(本部産学連携課)
電話:内線22857(外線03-5841-2857)
WEBサイト:<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/>

事務担当者の方々に研究契約をスムーズに遂行してもらうために 研究契約事務担当者向け説明会開催

5月11日(火)、5月13日(木)14時より(両日とも同内容)産学連携プラザ2階会議室にて、産学連携課企画チーム・知的財産部が主催となり、研究契約事務担当者向け説明会を開催しました。この説明会は、各部署の研究契約担当として新しく配属された方、またベテランの方にも最新の情報をお知らせし、研究契約のスムーズな遂行ができるよう毎年実施しているものです。今年度は、「共同研究契約書と受託研究契約書の変更点」「共同研究契約書」「海外機関との共同研究契約」「秘密保持契約」「成果有体物提供・受領届出書、契約審査の流れ及び会計処理」を取り上げました。

産学連携本部では、学内教職員、更には企業の関係者の方々に向け共同研究契約の内容と交渉の考え方を分かりやすくまとめた「共同研究契約書条文解説」、学内教職員向けに英文共同研究契約の内容と業務の進め方についてまとめた「国際対応のための英文共同研究契約マニュアル」を配付しています。これらの冊子を基に、契約の際の注意点や英文共同研究契約特有の条項等について説明しました。

今回は11日、13日の両日合わせて66名の参加があり、アンケートに回答した参加者の9割を超える方々から「参考になった」という声が寄せられました。特に、成果有体物の取扱いについて、「部署が知りたい内容を取り上げてよかった」との感想が多くありました。改善点として「担当者のレベルに応じた説明会を希望する」「トラブルの実例があればいい」等の声が寄せられたこともあり、今後の説明会で検討していきたいと考えております。

また7月13日(火)に教職員を対象にした「知的財産研修」も予定しておりますので、こちらもぜひご参加ください。



5月11日の説明会の様子。11日、13日の両日も会議室はほぼ満席だった。

【お知らせ】

「共同研究契約書条文解説」は産学連携本部HP(<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/kyodou/kyodou-manual.html>)に掲載しています。

「国際対応のための英文共同研究契約マニュアル」(学内限定)は産学連携本部HP(<http://www.ducr.u-tokyo.ac.jp/kyodou/kyodou-eng-manual.html>)に掲載しています(学内専用)。

DUOCR

検索

DUOCR
Division of University Corporate Relations
The University of Tokyo

ワタシのオシゴト / 第52回

Rings around the UT

法学政治学研究科等庶務係

市川 令さん

5年3ヶ月ぶりの東大のオシゴト



法文1号館1階にある八角講堂の模型です

昨年の7月に文科省から異動してきました。異動前はあちこちで「東大法学部は教員がうるさくて大変だぞ～」とおどかされたものですが、いざ来てみると職員・教員共に穏やかな方が多く、噂と違い和やかムードな部局だなと感じます。

庶務係での私の担当は、勤怠管理、雇用保険・社会保険手続、海外出張手続、調査もの対応、その他「担当がいなのが庶務係の仕事」と言われる雑多な業務等々。先生や研究員の方と仕事で一緒するのが始めてで、採用8年目（異動当初）でした。法学部では新鮮な気持ちで業務に取り組みました。やはり仕事をする上で先生方のお顔とお名前を一致させねば！と写真を見て覚えているうちに、今では先生方が夢に登場するまでに。肖像権の侵害には当たりませんよね？法学部なので少し気になるところです。私生活では最近引っ越しをしました。ガーデニングに初挑戦しよ

うと、ホームセンターで苺の苗を物色中。植える前から収穫が楽しみです♪



大島で出会った友と一緒に

得意ワザ：
寝付きがいい
自分の性格：
思い立ったら即行動
次回執筆者のご指名：
菊池 健さん
次回執筆者との関係：
同期、花の昭和54年組
次回執筆者の紹介：
お肉とお菓子をこよなく愛する、岩手が生んだイケメンサーファー

ケータイからみた東大
～東大ナビ通信～

東大ナビとは？

学内外に向け携帯電話を通じて教育イベント情報をお届けするサービスです。携帯サイトで学術俯瞰講義や公開講座、学内で開催される教育イベント情報を宣伝します。

加えて、QRコードや空メール送信によりメールアドレスを登録した皆様の携帯電話に、最新の教育イベント情報を、メールマガジンで定期的にお届けします。学内教育イベントの情報収集・広報活動の媒体としてご利用頂けます。

是非、東大ナビをご活用ください！



イベント情報を受けたい方

mail@utnav.jpに空メール送信！

- この記事のQRコードから
 - mail@utnav.jp宛てにメール送信
 - 携帯サイトutnav.jpにアクセスしてメルマガ登録ページへ
- ※携帯電話・PCどちらからも登録可能



返信メールから登録画面に入力！

- ご所属
- 性別・年齢など



登録完了！

- 登録確認メールが届きます
- 隔週でメルマガ・お得なクーポンGET！



イベントを宣伝したい方

携帯・PCサイトで申し込めます

- http://utnav.jpにアクセス
 - イベント掲載フォームから送信！
 - 追ってスタッフよりご連絡致します
- 教育企画室TREEオフィスまで！
- 内線；27823
 - メール；info@tree.ep.u-tokyo.ac.jp
 - オフィス；本郷キャンパス 第二本部棟403号室

FOREST NOW

行動シナリオの
「今」をレポート

パンフレット誕生!



パンフレット表紙写真
(パノラマのように広がる森がイメージされています)

—より多くの人に濱田総長の『行動シナリオ』を読んでもらいたい—

そんな思いから、行動シナリオパンフレットが誕生しました。企画・作成は行動シナリオ広報プロジェクト(※)が中心になって行い、6月中旬から各教職員への配付が始まっています。

パンフレットは「行動ビジョン」と「重点テーマ別行動シナリオ」を中心に構成されていますが、特徴的なのは、パンフレット冒頭部分です。「行動ビジョン」、「重点テーマ別行動シナリオ」、そして「部局シナリオ」が、それぞれ1ページずつダイジェストで紹介されています。

「行動ビジョン」の全文をまだ読んだことのない方は、まず、「行動ビジョン」のダイジェストを読んで全体のイメージを感じてみてください。

「重点テーマ別行動シナリオ」のダイジェストで紹介している達成目標例からは、本学がこれから2015年に向けて様々な課題に果敢に挑戦していくのだということがよくわかるのではないかと思います。

「部局別行動シナリオ」のダイジェストからは、取り上げている数例だけを読んでも、部局それぞれの個性溢れる取組を感じていただけるでしょう。これをきっかけに、ぜひ、ほかの部局のシナリオも読んでみてください。

理想の東京大学を実現するために、私たちは2015年に向けて歩き始めています。行動シナリオパンフレットをぜひ1冊あなたのお手元に!

(※)行動シナリオ広報プロジェクトは、佐藤理事、江川理事のもとに各部署の職員が協働して行動シナリオの情報発信を推進するプロジェクトです。

行動シナリオを読もう!

<http://www.u-tokyo.ac.jp/scenario/>

【お問い合わせ先】本部企画課(内線22393)

平成22年度 学内広報 発行スケジュール

号数	原稿〆切	発行日 (校了)	配布
1401	6月 29日(火)	7月 26日(月)	7月 30日(金)
1402	7月 28日(水)	8月 25日(水)	8月 31日(火)
1403	8月 30日(月)	9月 24日(金)	9月 30日(木)
1404	9月 30日(木)	10月 25日(月)	10月 29日(金)
1405	10月 29日(金)	11月 24日(水)	11月 30日(火)
1406	学生生活実態調査号		
1407	11月 26日(金)	12月 17日(金)	12月 24日(金)
1408	1月 6日(木)	1月 25日(火)	1月 31日(月)
1409	1月 31日(月)	2月 22日(火)	2月 28日(月)
1410	2月 28日(月)	3月 24日(木)	3月 30日(水)

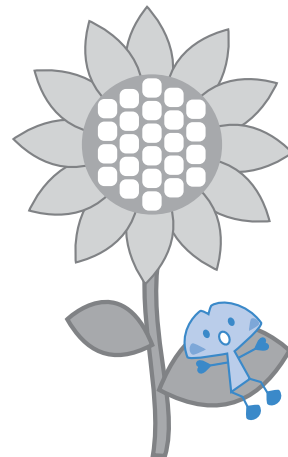
学内広報にご寄稿の際は、以下のURLにある「記事提出要領」をご参照ください。

http://www.u-tokyo.ac.jp/gen03/kouhou_j.html
【東京大学ホームページ】→【右下の学内広報アイコンをクリック】



問い合わせ先・原稿提出先

本部広報課 広報企画チーム
TEL: 03-3811-3393 内線22031
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp



INFORMATION

シンポジウム・講演会

シンポジウム・講演会

情報基盤センター

先端的大規模計算利用サービス第4回シンポジウム開催

■開催趣旨

「先端的大規模計算利用サービス」は、文部科学省研究開発施設共用等促進費補助金（先端研究施設共用促進事業）の支援を受けて、平成21年度から全国共同利用施設であるスーパーコンピュータを有する7大学が、社会貢献の一環として、大学で開発されたアプリケーションとスーパーコンピュータの民間企業への提供を行っているプログラムです。平成19、20年度に、文部科学省先端研究施設共用イノベーション創出事業の支援を受けて実施した「先端的大規模計算シミュレーションプログラム利用サービス」よりも幅広い研究課題に対して、スーパーコンピュータの提供を実施しています。本シンポジウムでは、本取り組みによる課題の成果報告と、現在の採択課題の中間報告を口頭発表、ポスター発表にて行います。

■開催日時など

開催日時： 7月1日（木） 13:30～18:30

開催場所： 丸ビルホール（丸ビル7階）
(<http://www.marunouchi-hc.jp/>)

定員： 200名

参加費： 無料

主催： 北海道大学情報基盤センター
東北大学サイバーサイエンスセンター
東京大学情報基盤センター
名古屋大学情報基盤センター
京都大学学術情報メディアセンター

大阪大学サイバーメディアセンター
九州大学情報基盤研究開発センター

■プログラム

発表者などの詳細はホームページでご確認ください。
<http://kyoyo.itc.u-tokyo.ac.jp/symp2010/>

13:00～	受付開始
13:30～14:00	主催者挨拶・文部科学省挨拶
14:00～15:00	採択企業からの報告（口頭発表） 採択企業から3社
15:00～15:20	休憩
15:20～16:20	採択企業からの報告（口頭発表） 採択企業から3社
16:20～16:45	ポスターセッション概要紹介
16:45～17:30	ポスターセッション 採択企業から8社
17:30～18:30	懇親会

■参加登録

6月24日（木）に受付終了となっておりますが、当日参加も受け付けておりますので、直接会場までお越しください。ただし、定員を超えた場合、予稿集をお渡しできない場合がありますので、ご了承ください。

■問い合わせ先

kyoyo@itc.u-tokyo.ac.jp
<http://kyoyo.itc.u-tokyo.ac.jp/>

シンポジウム・講演会

生産技術研究所

HPC 最先端シミュレーション技術に関する ジョイントシンポジウム開催

■開催趣旨

HPC（High Performance Computing）を活用したイノベーション創出への期待が益々広がってきています。生産技術研究所では、産学官連携による国家プロジェクトの中核拠点としてその期待に応えるための先端的・実用的シミュレーションソフトウェアの研究開発を推進しています。この度、関連する2つのプロジェクトに関する取り組みを紹介する機会として以下のシンポジウムを開催します。

【第1回「次世代ものづくり」シンポジウム】

文部科学省次世代スーパーコンピュータ戦略プログラムの「次世代ものづくり」（戦略分野4）における実施可能性調査の結果を踏まえ、次世代スパコンと国内のスパコン（独法・大学等のスパコン）をネットワークで結ぶ革新的ハイパフォーマンス・コンピューティング・

インフラ（HPCI）を戦略的に活用した先端的ものづくり設計システムの将来像をテーマに議論します。

【第2回「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」プロジェクトシンポジウム】

本プロジェクトで開発中の広範にわたる分野のイノベーション創出に貢献する基盤ソフトウェアにつき、いままでの研究成果を実装したソフトウェアβバージョンの内容と実証解析例を具体的に紹介します。このβバージョンはすでにインターネット公開をしております。

今回は、それぞれの事業の意義と取り組み内容について、より効果的に社会にPRする機会となることを目的とし、2日間のジョイントシンポジウムとして開催しますので、是非ご参加ください。

開催日時

【1日目】7月29日（木）10：00～17：00

文部科学省次世代スーパーコンピュータ戦略プログラム

第1回「次世代ものづくり」シンポジウム

【2日目】7月30日（金）10：00～18：00

文部科学省次世代IT基盤構築のための研究開発

第2回「イノベーション基盤シミュレーションソフトウェアの研究開発」プロジェクトシンポジウム

場 所 生産技術研究所コンベンションホール
(An棟2階)

主 催 生産技術研究所

共 催（予定）(独)日本原子力研究開発機構
(独)宇宙航空研究開発機構

後 援（予定）日本学術会議
自然科学研究機構分子科学研究所
(独)海洋研究開発機構
(独)理化学研究所
(財)計算科学振興財団

協 賛 学会（30機関予定）

参加費 無料

URL <http://www.ciss.iis.u-tokyo.ac.jp/>

お知らせ

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部

「教養学部報」第530(6月2日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——

「教養学部報」は、教養学部の正門傍、掲示板前、学際交流棟ロビー、15号館ロビー、図書館ロビー、生協書籍部、駒場保健センターで無料配布しています。バックナンバーもあります。

第530号の内容は以下のとおりとなっていますので、ぜひご覧ください。

寺田寅彦：支持体を考察する流れについて

嶋田正和：南米にマメゾウムシを求めて——ベネズエラ
昆虫採集記——〈前編〉

村田純一：哲学への情熱——門脇俊介さんの遺志

山本泰 教育GP公開シンポジウム「討議について討議する」

中島隆博：もう一步、世界へ！——UTCPへの誘い

長木誠司：選抜学生コンサートとピアノ委員会の催し

山本泰 教養教育開発機構主催国際シンポジウム
「教育から学びへ」

〈本の棚〉

石浦章一：三谷博／並木頼寿／月脚達彦（編）

『大人のための近現代史——19世紀編』

遠藤泰生：石橋純編著『中南米の音楽——歌・踊り・祝宴を生きる人々』

南北アメリカ「音楽誌」への期待

お知らせ

生産技術研究所

生まれ！ 発明王 第8回東京大学学生発明
コンテスト

今年で第8回を迎える発明コンテスト。本学の学生であればどなたでも参加できますので、皆様ふるって応募してください。また、教職員のみなさまにはコンテストの趣旨を、広く学生の方々に周知していただきますようお願い致します。

募集趣旨：若い学生のみなさんの柔軟な頭脳は、「ひょっとしたらノーベル賞級の大発明」につながるアイデアの宝庫かもしれません。これからは、新しいアイデアを個人の内に秘めておくばかりではなく、その権利を社会に主張していくことが大切です。東京大学では、柔軟な思

考を持つ学生のみなさんの豊かな発想とアイデアを支援し、それを形にするために、毎年発明コンテストを企画しています。バリバリの研究成果から、アイデア勝負のハタハリ応募まで、広い心で歓迎します。本企画を通じて、豊かな発想を大きな果実に実らせていただくとともに、「知的財産」に対する理解を深めていただくことを期待しております。将来、弁理士や弁護士を目指す人、勉強になりますよ。

応募資格：本学の学生（学部学生・大学院生等）

応募期間：6月4日（金）～9月30日（木）（必着）

※ まずは下記アドレスに氏名、所属、メールアドレスを送信してエントリー！折り返し応募書類ならびに過去の応募例などをお送りします。

エントリー先：hatsucon@iis.u-tokyo.ac.jp

日程：

10月下旬：書類審査終了 予備審査結果の通知

12月22日（水）：本審査 プレゼンテーション

平成23年1月初旬：審査結果の通知

平成23年1月下旬：表彰式

募集分野：

アイデアのみでも試作品段階でも結構です。

一般部門：日用品から専門知識を活かしたものまで、発明の分野を問いません。

課題部門：今年度の課題部門のテーマは「グリーン社会に貢献する発明」です。

審査：生産技術研究所（産学連携委員会）、産学連携本部、財団法人生産技術研究奨励会（TLO）、弁理士の関係者で行う予定

※ 審査においては、特許性よりもアイデアを重視する予定です。

表彰：発明大賞、産学連携本部長賞、生産技術研究所長賞、アイデア賞、奨励賞（数件）

※ 各賞に賞状、（株）ニコンより豪華副賞、賞金（総額50万円）／参加者全員に記念品

※ 優秀な発明に対しては、特許出願のアドバイス

※ 一人で複数の発明を応募しても構いませんが、発明ごとに別々に応募してください。

主催：生産技術研究所、産学連携本部、財団法人生産技術研究奨励会（TLO）

詳しくは下記ホームページをご覧ください。

<http://hatsumei.iis.u-tokyo.ac.jp/>

問い合わせ先・応募先：

〒153-8505 東京都目黒区駒場4-6-1

東京大学生産技術研究所内

財団法人生産技術研究奨励会 発明コンテスト係

電話：03-5452-6094 Fax：03-5452-6096

E-mail: hatsucon@iis.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

情報基盤センター

夏休み前に、論文探しの困ったを解決！ “情報探索ガイダンス” 各種コース実施のお知らせ

レポート・論文の作成や、ゼミ発表の準備の際、文献探して困ったことはありませんか？

情報基盤センター図書館電子化部門では、“情報探索ガイダンス” 各種コースを実施しています。

実際にパソコンを操作しながら実習するので、わかりやすいと大変好評です。

本学にご所属であれば、学生・教職員を問わず、どなたでも参加できます。ぜひご参加ください。

■ 7/7（水）12：10～12：30 自宅から検索するには？
（20分のワンポイント講習会）

自宅からデータベースや電子ジャーナルを使う方法だけ、知りたい。そんな方にお奨めなのが、このコース。ECCSアカウント認証によるSSL-VPN Gateway サービスを紹介します。

■ 7/8（木）12：10～12：40 日本の論文を探すには？
（30分のクイック講習会）

日本国内の雑誌論文の代表的なデータベース「CiNii」（サイニイ）の使い方をコンパクトに解説します。

■ 7/9（金）12：10～12：40
Web of Science を使うには？
（30分のクイック講習会）

Web of Science は、全分野の主要学術雑誌に掲載された論文のデータベースです。基本的な検索方法のほか、引用文献を手がかりとした検索などについて、コンパクトに解説します。

■ 7/20（火）16：00～17：00
EndNote Web を使うには？

Web上で使える文献管理ツール「EndNote Web」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■ 7/23（金）12：10～12：40
電子ジャーナルで論文入手
（30分のクイック講習会）

電子ジャーナルで目的の雑誌論文を入手する方法をコンパクトに解説します。

■ 7/27 (火) 12:00 ~ 13:00

文献リストをサクッと作成
～ RefWorks を使うには～

Web 上で使える文献管理ツール「RefWorks」の基本的な使い方を説明します。データベースからのデータの取り込み方、参考文献リストの自動作成方法などを実習します。

■ 7/29 (木) 15:00 ~ 16:00 文献検索早わかり

図書、電子ジャーナル、日本語論文 (CiNii)、英語論文 (Web of Science)、新聞記事など、各種文献の探し方を、まとめてコンパクトに解説します。

●会場:

本郷キャンパス 総合図書館 1階 講習会コーナー

●参加費: 無料

●予約不要

各回先着 12名。直接ご来場ください。

●授業に!ゼミに!ご希望の内容で出張講習します。

ご希望の内容、日時、会場などに応じたオーダーメイドの講習会を承っています。(無料)

授業の1コマや、ゼミなどにご活用ください。

ご希望の内容、日時、会場、人数、連絡先を、メールで下記問合せ先までご連絡ください。

詳細は下記サイトをご参照ください。

(<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/shuccho.html>)

●データベースや講習会の情報をお届けします。

Litetopi メールマガジン発信中。

当係発行の Litetopi (リテトピ) メールマガジンは、本学所属の方を対象に、各種データベースのニュースや講習会のご案内などをお届けします。配信ご希望の方は、下記アドレスまでメールでご連絡ください。(無料)



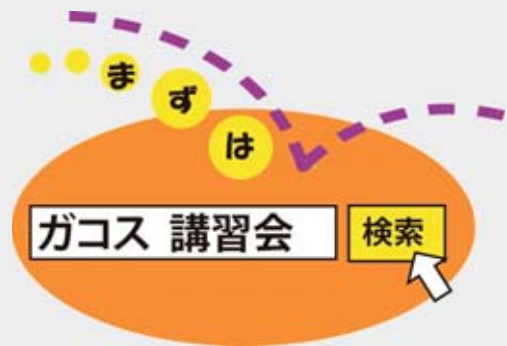
literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

●お問い合わせ:

学術情報リテラシー係 03-5841-2649 (内線: 22649)

literacy@lib.u-tokyo.ac.jp

<http://www.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/gacos/training.html>



月	火	水	木	金
			7/1	7/2
7/5	7/6	7/7 12:10-12:30 自宅から 検索	7/8 12:10-12:40 日本の論文	7/9 12:10-12:40 Web of Science
7/12	7/13	7/14	7/15	7/16
7/19	7/20 16:00-17:00 EndNote Web	7/21	7/22	7/23 12:10-12:40 電子ジャー ナル
7/26	7/27 12:00-13:00 RefWorks	7/28	7/29 15:00-16:00 文献検索 早わかり	7/30

お知らせ

本部学生支援課

東京大学音楽部管弦楽団
サマーコンサート 2010 のお知らせ

東京大学音楽部管弦楽団は1920年、東京帝国大学音楽部として発足しました。創立以来、近衛秀麿・柴田南雄・別宮貞雄・早川正昭の各氏をはじめ音楽界に数多くの人材を送り出しており、また95回の定期演奏会をはじめ演奏旅行も多数行っています。平成14年度には第2回学生表彰「東京大学総長賞」も受賞しました。その主な活動の一つとして、毎年東京近郊と日本各地でサマーコンサートを開催しています。今年度も多くの方のご来場をお待ちしております。

<つくば公演>

7月11日(日) 17:00開場 17:30開演
ノバホール

<東京公演>

7月19日(月・祝) 13:30開場 14:00開演
文京シビックホール大ホール

<豊田公演>

8月1日(日) 18:00開場 18:30開演
豊田市コンサートホール

<伊丹公演>

8月2日(月) 18:00開場 18:30開演

伊丹市立文化会館「いたみホール」大ホール
＜鹿児島公演＞

8月4日（水）18：00 開場 18：30 開演
宝山ホール（鹿児島文化センター）

指揮：三石精一（当団終身正指揮者）

曲目：チャイコフスキー

交響曲第4番へ短調

ボロディン

歌劇『イーゴリ公』より「だったん人の踊り」

スメタナ

連作交響詩『我が祖国』より

「モルダウ」「ボヘミアの森と草原から」

料金：全席自由 1000 円

チケットのお申し込み・お問い合わせ：

当団ホームページ（<http://www.ut-orch.com/>）または
メールアドレス ticket@todaiorch.cjb.net までご連絡
下さい。



【本件に関する問い合わせ】

本部学生支援課学生生活チーム

担当：山形（内線：22514）

E-mail：gakuseiseikatsu@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

お知らせ

大学院総合文化研究科・教養学部、先端科学技術研究センター

駒場博物館 「自然エネルギーの世界 - 未来を拓くテクノロジー」展

駒場博物館では、下記の日程で「自然エネルギーの世界 - 未来を拓くテクノロジー」展を開催いたします。是非ご参加ください。

開催期間：7月17日（土）～9月20日（月・祝）

開館時間：10：00～18：00（入館17：30）、火曜日休館

趣旨説明：温室効果ガスの排出抑制に向けて、自然エネルギーの利用拡大が求められています。自然エネルギーは、化石燃料のような枯渇性エネルギーと対比して「利

用したエネルギー量が消費速度と同等以上の速さで自然界の営みによって再生されるエネルギー源」という意味で「再生可能エネルギー」とも呼ばれています。再生可能エネルギーには、太陽光、風力、水力、地熱、波力、バイオマスなどさまざまなものがありますが、いずれも現在の地球環境が続く限り消費しきってしまうことが無いものです。このような、自然に存在する様々なエネルギーを私たちが使えるエネルギーに効率よく変換するためには、実は最先端のテクノロジーが必要になります。今回の展示企画「自然エネルギーの世界 - 未来を拓くテクノロジー」は、私たちが使えるエネルギーを生み出す装置の構造や仕組みなどについて学べるように9つのゾーンから構成されています。この展示企画が、エネルギーを通して「未来を考える」契機となればと考えています。

関連イベント：

7月16日（金）17：30～19：00

高校生のための金曜特別講座

7月17日（土）13：30～16：50

シンポジウム「持続可能社会実現に向けた新エネルギー利用の将来性」

その他、開催期間中の土曜日には特別ゲストによるギャラリートークショーを開催します。また、風車や太陽電池をテーマとした実験教室も企画中です。最新情報は駒場博物館ホームページにてご確認ください。

<http://museum.c.u-tokyo.ac.jp/>



お知らせ

地震研究所

第19回「地震研究所 一般公開・公開講義」

20年ほど前、学生達が自主的に始めた地震研究所の一般公開。今では全所をあげての夏の恒例イベントとなっています。今年は8月3日(火)に開催されます。

今年のテーマは『観る・視る・測る』。私たちがどのように地震や火山活動、地球内部で起きているさまざまな現象を観(み)て、視(み)て、測(はか)って理解しているのかを、ひろく一般の方々へお伝えできるよう準備を進めています。人気の学生実験は大幅リニューアル、サイエンスカフェでは最先端の研究エッセンスをギュッと盛り込みました。100年前の年代物から最新のものまでを展示した地震計博物館も拡大公開。ぜひご期待ください。

また同日15時からは安田講堂にて公開講義を開催します。『素粒子で地球を視る』(田中宏幸准教授)、『仮想現実空間で地震を「観る・視る・測る」』(市村強准教授)。一般公開、公開講義ともに登録不要、参加無料です。

日本人には身近な現象である地震や火山噴火を研究対象とする私たちは、普段から社会との接点を強く意識しています。一方で研究の現場でなされていることと一般の方々が抱く研究へのイメージに乖離があるのも事実です。等身大の研究内容を見てほしいという想いと、社会からの需要にも耳を傾けたいという想いを実現するための場のひとつが一般公開です。ぜひお越しください。
一般公開：8月3日(火)10:00～15:00、地震研1号館
公開講義：8月3日(火)15:00～17:00、安田講堂
いずれも参加無料、登録不要。



第19回 地震研究所 一般公開・公開講義ポスター

読者投稿写真

情報学環・福武ホール・秋



(大学院教育学研究科 大学経営・政策コース博士課程 楊天立さん)

あなたの撮った写真を 学内広報に載せませんか？

学内広報では教職員の皆さんが撮影した写真を募集します。あなたも自らの写真の腕を学内で披露してみませんか？

■応募条件

1. 東大のキャンパス内で撮影した写真であること
本郷に限らず、東大の敷地内ならどのキャンパスでも可。また、キャンパス内で撮った写真であれば、風景写真でなくても可。人、動物、モノが写った写真でもかまいません。
2. デジタルデータで送付すること
撮影はデジタルカメラ、あるいはカメラ付き携帯電話で行い、デジタルデータ(jpeg、tifのいずれか)をメール添付で送ってください。
3. 1回の応募につき3枚まで受付
多量の写真データ送付はご遠慮ください。
(添付ファイルの合計容量は5MBまで)

■掲載基準 & 掲載方法

学内広報編集スタッフが独断と偏見に満ちたセレクション(笑)を行い、スペースの空いたページに掲載します。掲載の際には、「作品名」と「撮影者」のクレジットを記載します(匿名希望も可)。また、良い写真が多数集まった場合は、応募写真を紹介する特集、応募写真を紹介する連載なども予定しています。

■締切

特にありません。良い写真が撮れたら送ってください。

■送付先

本部広報課広報企画チーム「学内広報写真募集係」まで。
E-mail: kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

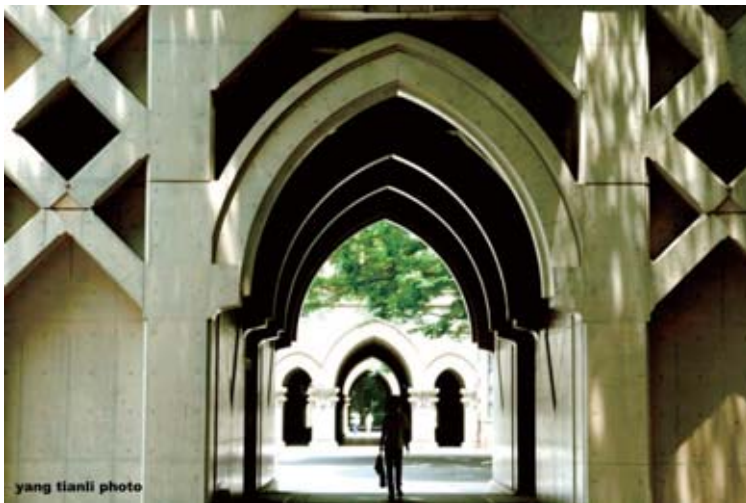
人事異動（教員）

発令日、部局、職、氏名（五十音）順

発令日	氏名	異動内容	旧（現）職等
（退 職）			
22.5.31	大路 樹生	大学院理学系研究科准教授	名古屋大学博物館教授
22.5.31	久野 純治	宇宙線研究所准教授	名古屋大学大学院理学研究科教授
（採 用）			
22.5.16	貴田 徳明	大学院新領域創成科学研究科准教授	
22.5.16	板谷 治郎	物性研究所准教授	物性研究所特任講師
22.5.18	小原 一成	地震研究所附属観測開発基盤センター教授	防災科学技術研究所地震研究部総括主任研究員
22.6.1	林 正彦	大学院理学系研究科教授	自然科学研究機構国立天文台光赤外研究部教授
22.6.1	福村 知昭	大学院理学系研究科准教授	東北大学金属材料研究所准教授
（昇 任）			
22.6.1	田中 純一	素粒子物理国際研究センター准教授	素粒子物理国際研究センター助教
22.6.1	辻 雄	大学院数理科学研究科准教授	大学院数理科学研究科准教授
22.6.1	尾田 正二	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科講師
22.6.1	富田 野乃	大学院新領域創成科学研究科准教授	大学院新領域創成科学研究科助教
（配 置 換）			
22.6.1	TIXIER EPOUSE MITA AGNES LAURE MARIE BEATRICE	先端科学技術研究センター准教授	生産技術研究所附属マイクロナノメカトロニクス 国際研究センター准教授

※退職後又は採用前の職等については、国の機関及び従前国の機関であった法人等のみ掲載した。

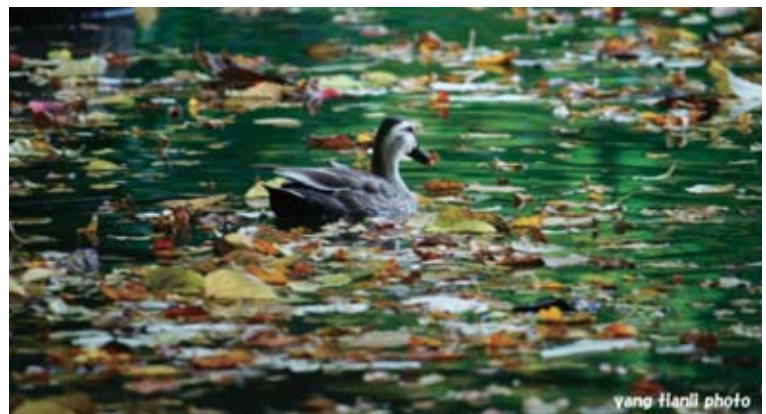
東京大学における教員の任期に関する規則に基づく専攻、講座、研究部門等の発令については、記載を省略した。



読者投稿写真

文学部三号館・夏

三四郎池・夏の終わり



（大学院教育学研究科 大学経営・政策コース博士課程 楊天立さん）

第83回五月祭開催

開催日

5月28日(金)午後 学内公開
 29日(土) 両日 一般公開
 30日(日)



今年のマスコミ「ほんまもん」

五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭

五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭
五月祭

多くの人で賑わう赤門前



五月祭一般公開初日は、あいにくの曇り空の下スタートしましたが、季節外れの低気温にもかかわらず、多くの来場者で賑わいました。



子供たちの憩いの場 ツリーハウスとハンモック

今年は、講演会、研究成果の展示、音楽演奏、各種パフォーマンスや模擬店等、約400件の企画が催されました。期間中、屋内は実験の参加型企画やバンド演奏等で賑わい、屋外は模擬店への呼び声やパフォーマンスへの歓声が響き渡り、いつもと違う賑わいのキャンパスの中、祭りを楽しみ、祝う人々の笑顔がたくさんありました。



ライブパフォーマンス(安田講堂前)

なお、途中、小雨が降ったにもかかわらず、一般公開日の2日間で、約75,000人(昨年度66,000人)もの方にご来場いただきました。

今年の五月祭も滞りなく無事に終了しました。ご協力いただいた学内関係者、ご来場の皆様に深くお礼を申し上げます。来年もよろしくお願いいたします。



門脇和丈委員長挨拶(フィナーレ:30日)

■本件問合せ先:本部学生支援課 山形(内線:22514)

五月祭 五月祭 五月祭 五月祭 五月祭 五月祭 五月祭

Contents

特集

- 02 追跡！リユースノートPCができるまで

NEWS

- 06 春の紫綬褒章受章

一般ニュース

- 09 生命科学ネットワーク
第10回東京大学生命科学シンポジウム
- 10 総括プロジェクト機構 航空イノベーション総括寄付講座
東京大学・ボーイング 航空と環境ワークショップ開催報告
- 11 学生相談ネットワーク本部
学生相談ネットワーク本部主催講習会「心をつなぐ工夫」(第1回)を開催
- 11 本部留学生・外国人研究者支援課
「東京大学外国人留学生特別奨学制度平成22年度4月期研究奨励費受給者証書授与式」を開催

部局ニュース

- 12 大学院理学系研究科・理学部
教職員と留学生・外国人研究者との懇親会
- 13 大学院薬学系研究科・薬学部
先端創薬棟の竣工式および寄贈式を開催
- 13 地震研究所
中間成果報告会「ここまでわかった首都直下地震」を開催
- 14 医学部附属病院
合同就職説明会(新宿NSビル)で看護師募集活動を実施
- 15 地震研究所
Silver Award at World Media Festival! (国際映像祭銀賞受賞!)
- 15 大学院教育学研究科・教育学部
国際交流室リニューアル記念フォーラム・留学生懇談会開催
- 16 大学院情報理工学系研究科、産学連携本部
東京大学コンソーシアム「東大グリーンICTプロジェクト発足会(グリーン東大工学部プロジェクト成果発表会)」開催される
- 17 大学院法学政治学研究科・法学部
新入生歓迎会、外国人留学生等との懇談会を開催
- 18 東洋文化研究所
日本・アジアに関する教育研究ネットワーク
第一回東洋文化研究所・ASNET 共催セミナーを開催
- 18 大学院総合文化研究科・教養学部
グローバル地域研究機構設立記念式典が挙行される
- 19 史料編纂所
日露関係史料をめぐる国際研究集会を開催

キャンパスニュース

- 19 本部学務課
平成22年5月1日現在学生数 一学部学生14,172人、大学院学生13,820人、研究生等853人

◆表紙写真◆

五月祭の風景(34ページに関連記事)

コラム

- 22 PCリユースのわ 第8回
- 22 インタープリターズ・バイブル vol.35
- 23 Policy + alt vol.10
- 24 Crossroad 産学連携本部だより vol.55
- 25 Relay Column「ワタシのオシゴト」第52回
- 25 ケータイからみた東大～東大ナビ通信～
- 26 FOREST NOW～行動シナリオの「今」をレポート～

INFORMATION

シンポジウム・講演会

- 27 情報基盤センター
先端の大規模計算利用サービス第4回シンポジウム開催
- 27 生産技術研究所
HPC 最先端シミュレーション技術に関するジョイントシンポジウム開催

お知らせ

- 28 大学院総合文化研究科・教養学部
「教養学部報」第530(6月2日)号の発行
——教員による、学生のための学内新聞——
- 28 生産技術研究所
集まれ! 発明王 第8回東京大学学生発明コンテスト
- 29 情報基盤センター
夏休み前に、論文探しの困ったを解決!
“情報探索ガイダンス”各種コース実施のお知らせ
- 30 本部学生支援課
東京大学音楽部管弦楽団
サマーコンサート2010のお知らせ
- 31 大学院総合文化研究科・教養学部、先端科学技術研究センター
駒場博物館「自然エネルギーの世界-未来を拓くテクノロジー」展
- 32 地震研究所
第19回「地震研究所 一般公開・公開講義」

事務連絡

- 33 人事異動(教員)

巻末特別記事

- 34 第83回五月祭開催

淡青評論

- 36 ワーク・ライフ・バランスを目指して

編集後記

学内広報編集スタッフの特権を使ってちょっとPRを……2年前に刊行された本学130周年記念出版物『ACADEMIC GROOVE』の続編『mini GROOVE』を現在、3組の学生チームが制作中(7月末完成予定)。これはいわば『ACADEMIC GROOVE』の縮小版で、来るオープンキャンパスで配布予定です。もちろん学内の方々も広報センターなどで入手できます。grooveに満ちた、東大らしからぬこのメディア、皆さんもぜひ、手に取ってみてくださいね!(し)



七徳堂鬼瓦

ワーク・ライフ・バランスを目指して

昨年6月より男女共同参画室の室長を拝命し、この1年にわたり東京大学における男女共同参画の取組み、特に女性研究者のキャリア支援やライフサポートなどの環境やシステム作りを通して貴重な経験をさせていただいた。

振り返ってみると、私が男女共同参画に関わるようになったのは、助教授になったばかりの2001年「男女共同参画等に関する検討ワーキンググループ」からであった。その後、推進委員会、そして全学委員会組織である「男女共同参画室」が設置され、それぞれメンバーに加えていただいた。そして、ワーキンググループ発足時には独身だった私は、結婚し、今では子育ての真っ最中。奇しくも、東京大学の男女共同参画の歩みとともに私も「働く女性の問題」に直面してきたといえる。

覚悟はしていたものの、子どもが生まれて生活が一転した。特に、産休明け直後は保育園に入ることができなかったのも、時間が加速したのではないかと思うほど、あっという間に1日が終わってしまい、仕事と育児の両立という問題に直面した。子どもが保育園に通いだして仕事に専念できる時間が確保できたが、出産前のような仕事第一の生活では、当然ない。限られた時間内で職責を全うできているか、自信のない部分もあるが、ただ間違いなく子どもと共に過ごすことで私の生活と人生は豊かになった。

覚悟はしていたものの、子どもが生まれて生活が一転した。特に、産休明け直後は保育園に入ることができなかったのも、時間が加速したのではないかと思うほど、あっという間に1日が終わってしまい、仕事と育児の両立という問題に直面した。子どもが保育園に通いだして仕事に専念できる時間が確保できたが、出産前のような仕事第一の生活では、当然ない。限られた時間内で職責を全うできているか、自信のない部分もあるが、ただ間違いなく子どもと共に過ごすことで私の生活と人生は豊かになった。

少子高齢化に向かっている日本の社会において、“ワーク・ライフ・バランス”は重要だ。特に、女性の場合にはキャリアの形成時期と出産・育児という重要なライフ・イベントが重なるため、研究と育児の両立は大きな課題である。私の子どもはキャンパス内の保育園に通っている。そのおかげでゼロ歳児のときには昼休みに自転車ですぐに授乳に通うこともできたり、また、保育園で発熱することがあっても、すぐに迎えに行ける。日中、安心して子どもを預けることのできる保育園がキャンパス内にあることは大変恵まれていることである。かつて本郷と駒場キャンパスに2つだった保育園は、現在は白金・柏も加えて各4キャンパスに合計7つとなった。

少子化対策、人口減少の中での人材の有効活用の観点からも、女性研究者を育て、活躍の機会を与える人材育成は重要だ。裏返せば男性の家庭協力も欠かせない。最近の東京大学の男女共同参画の取組みは目覚ましいが、一朝一夕で築き上げられるものではない。これからも、男女ともに“ワーク・ライフ・バランス”を実践でき、仕事と家族を大事にする組織作りを持続してほしい。

大島まり (大学院情報学環)

(淡青評論は、学内の教職員の方々をお願いして、個人の立場で自由に意見を述べていただく欄です。)

[訂正]

学内広報において、一部誤りがありましたので訂正いたします。関係部署および関係者の皆様に深くお詫び申し上げます。

No.1399 (2010.5.25)

24 ページ：枠内右下

(誤) (生産技術研究所)

(正) (大学院工学系研究科・工学部)

この「学内広報」の記事を転載・引用する場合には、事前に広報室の了承を得、掲載した刊行物若干部を広報室までお送りください。なお、記事についての問い合わせ及び意見の申し入れは、本部広報課を通じて行ってください。

No.1400 2010年6月22日

東京大学広報室

〒113-8654

東京都文京区本郷7丁目3番1号

東京大学本部広報課

TEL : 03-3811-3393

e-mail : kouhou@ml.adm.u-tokyo.ac.jp

http://www.u-tokyo.ac.jp/